

メルコスールにおける主要輸出農産物の生産と市場

メルコスールにおける
主要輸出農産物の生産と市場

平成7年2月

国際協力事業団サン・パウロ事務所

農業情報室

平成7年2月

サン・パウロ

703
84.1
SP
ARY

メルコスールにおける
主要輸出農産物の生産と市場

27296

JICA LIBRARY



1118426(4)

<平成7年2月>

国際協力事業団サン・パウロ事務所農業情報室

(在サン・パウロ日本国総領事館分室)

703
84.1
SP

SP
JR



13
96

< 目 次 >

1	穀 類	9
1.1	小 麥	9
1.1.1	國際市場動向	9
1.1.2	×16.2-16.4の生産と市場	12
1.2	と ち ち ね	20
1.2.1	國際市場動向	20
1.2.2	×16.2-16.4の生産と市場	23
2.	油脂原料作物	28
2.1	大 豆	28
2.1.1	國際市場動向	28
2.1.2	×16.2-16.4の生産と市場	34
3.	工業原料作物	52
3.1	綿	52
3.1.1	國際市場動向	52
3.1.2	×16.2-16.4の生産と市場	53
4	嗜好作物	62
4.1	コ ー ヒ ー	62
4.1.1	國際市場動向	62
4.1.2	×16.2-16.4の生産と市場	63

5	果 实	-----	65
5.1	りんご及び梨	-----	65
5.1.1	国際市場動向	-----	65
5.1.2	XUJZ-VU 対4) 生産と市場	-----	68
5.2	かんきつ類	-----	79
5.2.1	国際市場動向	-----	79
5.2.2	XUJZ-VU 対4) 生産と市場	-----	82
5.3	ぶどう	-----	90
5.3.1	XUJZ-VU 対4) 生産と市場	-----	90
5.4	アユニ - ナシ	-----	92
5.4.1	アユニVU 対4) 生産と市場	-----	92
6	牧畜部門	-----	94
6.1	牛 肉	-----	94
6.1.1	国際市場動向	-----	94
6.1.2	XUJZ-VU 対4) 生産と市場	-----	99
6.2	鶏 肉	-----	101
6.2.1	国際市場動向	-----	101
6.2.2	XUJZ-VU 対4) 生産と市場	-----	108

< 図表索引 >

表	1	小	全	: 世界の生産	-----	9
	2			: 世界の輸出の推移	-----	10
	3			: 世界の輸出入	-----	11
	4			: 世界の貿易	-----	11
	5			: 世界の小麦市場、年間成長率実績及び予想	---	11
	6			: アルゼンチンにおける小麦の生産改革と環境推移	-----	12
	7			: アルゼンチンの主要生産地 (90/91年度)	-----	12
	8			: 主要国の収収比較	-----	13
	9			: アルゼンチンの環境推移	-----	13
	10			: ブラジルの生産推移	-----	14
	11			: ブラジルの主要生産改革	-----	14
	12			: メキシコにおける小麦の生産コスト	-----	15
	13			: メキシコにおける小麦の生産消費状況	-----	17
	14			: アルゼンチンの主要輸出先国	-----	18
	15			: アルゼンチンの仕向先	-----	19
	16	とうもろこし		: 世界のとうもろこし市場	-----	20
	17			: 世界の輸出入	-----	21
	18			: 世界の貿易	-----	21
	19			: 飼料用穀物の成長率予想 (%)	-----	22
	20			: アルゼンチンのとうもろこし生産地帯	-----	24
	21			: アルゼンチンにおけるとうもろこしの生産改革	-----	24
	22			: 主要輸出国の単収比較	-----	24
	23			: アルゼンチンの輸出先市場	-----	25
	24			: アルゼンチンのとうもろこし仕向先 (91/92年度)	---	25
	25			: メキシコの生産状況	-----	26

表	26	大豆の輸入状況	27
	27	大豆の生産と大豆の油及粕の歩留	28
	28	20年間の大豆生産の推移	29
	29	世界の生産推移	29
	30	世界の大豆(豆)需給	30
	31	世界の大豆油需給	31
	32	世界の大豆粕需給	31
	33	大豆(豆)の主要輸出国及び輸入国	32
	34	大豆油の主要輸出国及び輸入国	32
	35	大豆粕の主要輸出国及び輸入国	32
	36	世界の大豆市場の平均収率	34
	37	アメリカの大豆生産と大豆の割合	36
	38	アメリカの大豆生産の推移	36
	39	アメリカの大豆栽培の地域別収率	37
	40	アメリカの大豆生産地 (1990/91)	37
	41	主要生産国における大豆の収率比較	38
	42	アメリカの大豆生産の推移	39
	43	アメリカの大豆生産の推移	39
	44	油及粕の収率	39
	45	アメリカの搾油工場数と能力	40
	46	大豆油のコスト構成	40
	47	大豆及び副産物のアメリカの輸出先	41
	48	アメリカの大豆輸出先市場 (大豆)	41
	49	アメリカの大豆輸出先市場 (大豆油)	41
	50	— — — (大豆粕)	41
	51	大豆及び副産物の輸出推移 (大豆)	42
	52	— — — (大豆油)	42
	53	— — — (大豆粕)	42

表	54	大豆	ブラジルの大豆推移	43
	55		ブラジルの大豆栽培状況	44
	56		ブラジルの大豆及び大豆油輸出(重量)	46
	57		----- (食糧)	46
	58		----- (搾取品)	46
	59		パラグアイの大豆生産比(90/93)	47
	60		パラグアイの大豆生産推移	48
	61		大豆輸出推移	48
	62		大豆油輸出推移	48
	63		ウルグアイの大豆推移(大豆)	49
	64		----- (ヒマワリ)	49
	65		メキシコの大豆生産	49
	66		メキシコの大豆油生産	50
	67		メキシコの大豆油消費	50
	68		メキシコの大豆(豆)輸出	50
	69		メキシコの大豆油輸出	50
	70		メキシコの大豆粕輸出	51
	71		メキシコのヒマワリ生産	51
	72		メキシコのヒマワリ消費	51
	73	綿	世界の綿供給状況	52
	74		アフリカにおける綿の生産推移	53
	75		アフリカにおける綿の主要生産比率(90/91)	53
	76		ブラジルの主要綿の生産推移(草綿)	55
	77		----- (木綿)	55
	78		ブラジルの主要綿の主要生産比率(1992)	55
	79		パラグアイ国における綿の生産状況(92/93)	57

頁	80	綿	: バラアタイムおよび綿の生産推移	-----	58
	81	'	: バラアタイムの綿織物輸出推移	-----	59
	82	'	: バラアタイムの綿織物輸出先市場	-----	60
	83	'	: ヌルコスールの綿織物生産	-----	61
	84	'	: ヌルコスールの綿織物輸出	-----	61
	85	'	: ヌルコスールの綿織物輸入	-----	61
	86	コ-ヒー	: 世界の輸出国々交換	-----	62
	87	'	: ブラジルのコ-ヒー生産推移	-----	63
	88	'	: ブラジルのコ-ヒー生産推移	-----	64
	89	'	: ブラジルのコ-ヒー輸出推移	-----	64
	90	'	: ブラジルのコ-ヒー輸出先市場	-----	64
	91	果 実	: リンゴ-南半球の供給状況	-----	66
	92	'	: 梨-南半球の供給状況	-----	66
	93	'	: リンゴ-世界の生産と輸出	-----	67
	94	'	: 梨-世界の生産	-----	67
	95	'	: リンゴ-アルゼンチンの栽培面積	-----	68
	96	'	: 梨-アルゼンチンの栽培面積	-----	69
	97	'	: リンゴ-アルゼンチンの生産と仕向先	-----	70
	98	'	: アルゼンチンの輸出推移	-----	71
	99	'	: アルゼンチンの輸出先市場	-----	71
	100	'	: 梨-アルゼンチンの生産と仕向先	-----	72
	101	'	: アルゼンチンの輸出推移	-----	73
	102	'	: アルゼンチンの輸出先市場	-----	73
	103	'	: ブラジルのおよびリンゴの生産推移	-----	74
	104	'	: ブラジルのリンゴ栽培面積	-----	74
	105	'	: ブラジルのリンゴ輸出推移	-----	75
	106	'	: ブラジルのリンゴ輸出市場	-----	75

133	:	:	世界の牛肉輸入量と主要輸入国	92
134	:	:	×1002-1011 世界の牛肉の1人年間推定消費量	99
135	:	:	世界の牛肉の飼育数	102
136	:	:	世界の牛肉の飼育数と主要国	102
137	:	:	世界の牛肉の生産量	103
138	:	:	主要国と世界の牛肉の推定消費量	104
139	:	:	主要国と世界の牛肉の1人年間消費量	104
140	:	:	牛肉: 主要5ヶ国の輸入と輸出	105
141	:	:	牛肉: 主要国の輸入と輸出	106
142	:	:	牛肉: 主要国の輸入と輸出	106
143	:	:	牛肉: 国際価格の変動	107
144	:	:	ブラジル・ドイツ - 輸入と輸出	109

1. 穀類

1.1 小麦

1.1.1 国際市場動向

小麦は世界の基礎食糧の需要は1つに2つ増え、世界の穀物取引量の50%を占めている。80年代の生産・消費量は年々1.7%の増加を続けた。90年代の当初3年間は、小麦の平均生産量は557百万トンを、消費量は547百万トン、貯蔵量は99百万トンであった。この間、小麦の価格は1980年代前半の増大と不況時期（86/87年）に80年代で最高レベル（世界の消費量の33%）に達しており、その理由は低価格の時代に形成した期間にある。この間、穀物取引の増大は、輸出国、輸入国の両方から、大規模な拡大がみられた。そのうち、70年代の1.7ト/ヘクタールと2.15ト/ヘクタールに伸びた。80年代前半は、特徴的な世界的な需要の増大と、消費量の減少による世界の在庫を増大させた理由があった。

小麦の増大は、穀物取引の革新によるものであり、各国の政府が行った生産奨励策が重要な役割を果たした。大半の国において、小麦の生産者に対する、政府の補助や価格制限の下で行われた肥料、農薬等の補助、低利の融資、輸上の補助、恩恵措置等が、その理由である。米国やECは、特に農業の増大に力を入れている。

この時期は、1987/88年以降、今日の小麦の価格を振り返ると、同年以降、国際価格の回復により、世界の在庫の調査が行われ、相対的に、ECは、補助削減の要求が行われた。特に、1985年の国合の逼迫は、食糧生産の増大により、小麦の在庫を減少させた。小麦生産者に対する補助を削減し、穀物取引の流通の方法を採用した。

主要国においては、政策の悪化、経済的成長に伴う世界の消費の増加と、小麦の在庫の減少は、消費量の23-24%のレベルを維持し、現行の供給均衡の状況にある。

表1 小麦：世界の生産

国別	1987/88	88/89	89/90	90/91	91/92
中国	85.8	85.4	90.8	98.2	96.0
EC	71.4	74.7	78.6	84.7	90.0
CEI	83.8	84.4	92.3	108.0	77.2
インド	49.3	46.2	54.0	49.7	54.5
米国	57.4	49.3	55.4	74.5	53.9
東ヨーロッパ	39.9	47.8	43.2	41.1	38.3
カナダ	26.0	16.0	24.4	24.4	32.8
オーストラリア	12.4	14.1	14.3	15.4	10.0
アルゼンチン	8.8	8.4	10.2	10.5	9.0
その他	72.2	77.4	73.9	30.5	83.9
計	501.5	500.7	537.1	537.0	541.6

世界の小麦貿易は 80年代後半期から 90年代前半にかけて極度の相対的停滞、年別 95~105 億トンの規模を維持した。世界の小麦市場構造は不況と競争激化の中での大型輸出国の減少、旧ソ連や中国の急増、この両国への輸出の 35%が占められた。

世界の小麦輸出は 57 国に集中し、主要輸出の 90%は占められた。輸出規模の順に、米国、EC、カナダ、オーストラリア、トルメンタ、及びアルゼンチンと競争激化を繰り返した。最近では他の生産国に比し輸出増産の傾向が顕著となった。

表 2 小麦：主要輸出の推移

国 別	1982/83 平均		1989/90 平均	
	輸出品(1,000t)	増産比(%)	輸出品(1,000t)	増産比(%)
米 国	38.9	37.9	32.3	32.5
EC	16.8	16.3	20.7	20.8
カナダ	20.9	20.3	20.6	20.7
オーストラリア	11.3	11.1	10.3	10.3
トルメンタ	8.4	8.2	5.4	5.5
その他	6.2	6.1	10.0	10.1
世界計	102.5	100.0	99.3	100.0

出典: USDA

80年代後半期から 90年代前半にかけて世界貿易の停滞と減少に伴う世界在庫の増加が、米国及び EC における輸出補助の強化を促した。この両者の競争、上位の輸出国への競争から補助の輸出は世界貿易の大勢を占めるようになった。1985年に米政府の設立した輸出保証プログラム (EEP) の開始と共に、米国と EC の激しい競争が展開された。この小麦の国際市場の形成と競争の激化に伴って、最近政府間の競争力向上のための補助金の削減、EC の 70~150、EC の 70~150 に達した。

最近政府間の競争力向上のための小麦の国際市場への競争力向上の方向は

- 1) 米国及び EC における生産に対する強力な保護主義が世界の小麦貿易及び競争に大きな影響を与えている。
- 2) この先進国における競争力向上の輸出補助、補助削減と持たせ、トルメンタと競争力向上の小麦輸出国の競争力向上の方向は
- 3) 国際市場における競争の激化、補助の問題のみならず、新しい産国 (トルコ、カナダ、トルメンタ等) による輸出余力の増加である。
- 4) 最近の世界的な需要の増加が顕著となり、この世界的な需要の増加は競争力向上の方向は

表 3

小麦：世界の輸出入

100万ト

国別	1987/88	88/89	89/90	90/91	91/92
輸出国					
米 国	43.4	37.6	34.0	28.3	34.7
カナダ	23.6	13.5	17.0	20.8	26.0
EU	14.8	21.0	21.0	20.0	21.0
オーストラリア	12.2	10.8	10.9	11.7	8.2
アルゼンチン	3.8	3.5	6.0	9.7	5.5
その他	7.2	10.5	8.1	7.9	13.9
世界計	105.0	96.9	97.0	93.4	107.3
(輸入に占める%)	3.6	3.6	6.2	5.0	5.1
輸入国					
EU	21.5	15.5	14.0	15.0	21.0
日本	15.0	15.5	13.0	9.5	15.5
EU	5.7	5.4	5.4	5.6	5.8
EU	2.2	2.5	2.5	2.5	1.9
オーストラリア	3.3	2.8	2.1	2.0	1.5
その他	57.3	55.2	60.0	58.8	61.6
世界計	105.0	96.9	97.0	93.4	107.3

出所: USDA

表 4

小麦：世界の需給

100万ト

区分	1987/88	88/89	89/90	90/91	91/92
期首在庫	176.4	147.5	116.9	121.7	142.7
生産量	501.5	500.7	537.1	573.1	541.6
供給量計	677.9	648.2	654.0	714.8	684.3
消費量	501.5	509.7	511.7	573.8	554.6
輸出量	105.0	96.9	97.0	109.8	119.9
期末在庫	147.5	116.9	115.7	140.4	129.8
対需/消費 (%)	29.4	23.3	22.6	24.5	23.4

出所: USDA

USDA の 90年代の小麦の需給の推移は、調査は 53 年 80年代の需給の平均値に見込められ、
 又、世界の 1990年の需給の調査結果は、生産性向上の余地が少なく、30%の増産が期待され、
 又、この需給の推移は 70年代の状況と比べて、需給の傾向は、需給の増大傾向にあることが認められる。
 小麦の需給の推移は、この需給の推移は、国際貿易の需給の増大傾向は、今後 20 年間で平均 4%の増大が
 見込まれることが認められる。

表 5

世界の小麦市場、年別成長率、実質及び対需

%

区分	1970/80	80/90	90/2000
生産	3.4	2.8	2.7
消費	3.3	2.4	2.7
輸出	0.5	1.1	4.0

出所: 麦版

1.1.2' xiv コス-iv に おける生産と市場

1) 生産

< アルゼンチン >

アルゼンチンの小麦栽培地帯は、パンプ地区の全般にわたっている。中でもブエノスアイレス州南部及びウーゲン地区と、パンプ州南部、ブエノスアイレス州北西部、コルドバ州西部が中心地帯である。このパンプ地区は、大豆と小麦の輪作形態をとるが、最近大豆栽培が開始されたブエノスアイレス州南部では、単一栽培の形態をとる。大麦、小麦からなる、新しい作物と小麦の栽培も盛んである。

表 6 アルゼンチンにおける小麦の栽培と生産

州 別	1982/84 平均		1989/91 平均	
	作付面積 1000ha	比率 (%)	作付面積 1000ha	比率 (%)
ブエノスアイレス	3998.9	59.2	3151.2	56.7
パンプ州	1069.5	15.8	842.5	15.2
コルドバ	748.7	11.0	655.0	11.7
パンプ	624.1	9.2	606.2	10.9
その他	317.5	4.7	300.5	5.4
合計	6758.4	100.0	5555.5	100.0

出所: J.N.S

表 7 小麦: アルゼンチン生産量 (90/91 表)

州 別	作付面積 1000ha	収穫面積 1000ha	生産量 1000t	収量 kg/ha
ブエノスアイレス	3433.2	3302.9	6,555.7	1,984
パンプ州	935.2	891.1	1,936.3	2,123
コルドバ	829.1	767.5	1,254.5	1,624
パンプ	728.1	610.8	858.7	1,406
ミナソ	132.1	115.0	210.8	1,833
ウーゲン	33.8	33.0	49.5	1,500
チリコ	27.0	22.0	33.0	1,500
その他	8.8	13.4	21.4	1,597
ブエノスアイレス	11.0	10.5	14.3	1,362
その他	39.8	31.3	57.4	1,333
合計	6,781.1	5,797.5	10,991.6	1,894

出所: J.N.S

上表のとおり、アルゼンチン全国生産量の 50% はブエノスアイレス州、パンプ州、コルドバ州及びパンプ州に集中している。主要な国内産小麦は、パンプ州の 58% (表 7)

小麦はアルゼンチン栽培の主要作物の中で、1980年代平均の全国栽培面積の 28.4%、生産量の 29.3% を占める。

1. Pilsener 小麦の播種は冬期に行動するが、国内各地の土壌気象条件が小麦の栽培に適合している故、播種時期は長し、東北地方は約5月13日、2/2 Pilsener 南部、7月下旬～8月上旬に収穫する。収穫は11月に開始し、1月上旬に終了し、南半球の小麦は当分の4半期から北半球の収穫期に及ぶ。高圧の市場に出原出来る利便性が2112

2. Pilsener 小麦の栽培は1970年代後半に TUGO PAV と TUGO FIDO (又 TUGO CANOEM) の2種が主として、その大半は TUGO PAV の生産性(1.177-1.184)及び(1.184)の80年代始め、17.6 g/ha (199 = 15 kg) の90年付のものは、19.0 g/ha 増加して、2010年1980/85年比は 22.3 g/ha 最高の記録を示した。Low 全般に肥料の使用量が少く、肥料を大量に用いる他の輸出国と比較すると低い水準にある。TUGO 小麦の肥料使用量は栽培面積の全体の 20% (800 t ~ 1,000 t/ha) 程度に抑えられている。

表 8 小麦：諸国の収水比較

国別	1989/90	1990/91	1991/92	平均
EU	4.83	5.14	5.35	5.10
米国	2.20	2.66	2.31	2.39
カナダ	1.80	2.27	2.26	2.11
TUGO PAV	1.86	1.91	2.00	1.92
オーストラリア	1.58	1.63	1.48	1.56

出所: USDA

表 9 小麦：TUGO PAV の生産推移

年度	作付面積 1,000ha	収穫面積 1,000ha	生産量 1,000t	収水 t/ha
1980/81	3,555.9	4,601.7	7,615.4	1,655
81/82	6,227.4	5,709.4	8,125.6	1,423
82/83	7,008.0	6,924.1	14,609.8	2,108
83/84	6,989.9	6,901.7	12,195.3	1,767
84/85	5,991.3	5,942.5	11,250.7	2,230
85/86	5,728.1	5,296.9	8,661.8	1,635
86/87	5,089.2	4,956.7	8,904.9	1,796
87/88	4,889.5	4,784.2	8,385.1	1,962
88/89	4,837.8	4,707.1	8,475.6	1,800
89/90	5,650.3	5,419.8	10,293.6	1,899
90/91	6,178.1	5,797.5	10,991.6	1,896

出所: JNA

上表は JNA (穀物庁) のデータに基づき、過去10年間の小麦生産推移を示す。上表は、1980年以降の栽培面積及び生産量の大幅な増加が認められる。80年代の始め、Pilsener 小麦の

に際して行われた米国の米の経済制裁から、ソ連がフルゼンに穀類を求めて陸路に
 表方面積の増大があるため、米の肉体的修復や国際価格の下落に伴う生産規模の縮
 小が懸念されている。

① トラウ

表 10 小麦：トラウの生産推移

年度	表方面積(1,000ha)	生産(1,000t)	収率 kg/ha
1983	1,885.0	2,265.3	1,201
84	1,741.3	1,959.5	1,123
85	3,626.7	4,320.3	1,645
86	3,564.2	5,689.7	1,472
87	3,455.9	6,034.6	1,746
88	3,467.6	5,738.0	1,655
89	3,281.4	5,552.8	1,692
90	2,680.9	3,093.5	1,154
91	1,994.8	2,921.3	1,464
92	1,975.0	2,796.0	1,428
93	1,356.7	2,323.6	1,713

出所：1996

トラウは小麦の小麦市場は長期にわたって国内需要に依存して生産が不足し、その大半を海外
 に依存する状態に陥り、80年代の中期に不況に陥り国内産奨励金の削減と輸入の保護が
 導入された結果、80年代後半に、600万トンの近い生産量に達して自給態勢に近
 と一歩の進展に達している。しかし、90年代に入ると穀物の取扱に阻害を及ぼす政府の
 政策の緩和の進展、小麦取引の自由化の導入による生産者の収入の減少と再び生産規模の縮小に
 つながりつつある。小麦はロシア最大の消費国でも、最大の輸入国でもある。

国内の生産量の増加に伴って、ロシアは、小麦の輸入国から、輸出国に転じた。輸出量は、1990年代
 中期以降は高水準に推移し、1990年代後半に急増した。その5月に合同生産が99名に達した。

表 11 小麦：ロシアの生産状況

州	1991	1992	1993
バシコフ	1,825.9	1,573.0	1,023.0
ヤロスラフ	682.7	789.9	1,015.4
ウラル	107.5	104.4	116.6
ウラル	141.8	102.0	73.1
ウラル	155.9	116.4	70.1
その他	11.5	11.2	25.4
計	2,921.3	2,685.9	2,323.6

出所：1996

4) 市場

XILO 2-10 における小學市場は 国内に 南米域の輸入国 PUOLTV と 南米域の輸入国 プラチ
 ルを含む 2 の 大規模市場である。当然 プラチルと PUOLTV は 主要供給国である。PUOLTV は プラチ
 ルに 設備投資している。

XILO 2-10 による 1 国の 提出した データ と 比較すると XILO 2-10 の 市場に 対する 割合は 3%
 市場消費量に 対し 2.3%、 世界輸出の 9%、 世界輸入の 1.3% に なる。

80 年 11 月の 統計を みるに 南米域 (プラチル と PUOLTV) の 自給能力は 向かって 向上している。視察によ
 り 中野 プラチルは 政府の 計画に 輸入代替の ための 国内生産政策 による。2010 年 向うの 生産 倍増、 設備
 投資の 向上 している。 1990 年代 後半 以降、 南米域は 中断した 生産は 下降し 再び 輸
 入に 依存する 形 になって いる。

1997 年、 南米域も 同様の 傾向の 視察に 輸入の 下を 減少した。 北米域は 輸入の 減少は 90%
 国内の PUOLTV に 対し 輸入 した。 PUOLTV は 生産、 及び 輸入の 下を 圧倒的に 位置に
 あり、 FAO の 統計によれば 80 年 末の XILO 2-10 全体の 生産額の 58% 生産の 64%、 輸入の
 99% に なる。

この ため XILO 2-10 の 中で 圧倒的に 主たる PUOLTV の 小學部門は 今の 市場統合の
 更に 有利な 条件に あり いる (他の 原因 がある)。 北米域は PUOLTV による 小學教育の 反復の プラチルは
 より 高い ことが あり いる。 プラチル と PUOLTV は 1997 年 以降 規模の 大きさを 比較する
 と なる。 北米域は 生産 コスト PUOLTV 同様の 中、 北米域は 低く 国際競争力 を持っている。 北米域
 がある。 2010 年 以降 国内の 一部の 生産 している こと 文脈 がある。 PUOLTV の 小學は
 主要な 生産 している。

表 12 XILO 2-10 における 小學の 生産コスト

品名	PUOLTV	プラチル	US\$/ha
肥料コスト	60.81	65.27	66.96
農薬肥料	13.13	85.16	118.58
種子	20.71	44.64	
計	94.65	165.07	165.44

出所: SAQP-ARGENTINA.

国内の 肥料工業の 成長は プラチルと PUOLTV に 集中し、 国内生産の 90% は 20 年 以降 になる。

表 13

X16JZ-W10-1043 小麦の生産と消費

国 別	1980/82		1989/90		増減 %
	1,000ha	%	1,000ha	%	
収穫面積					
アムセバシ	4,919	62	4,939	58	-
ブラスル	2,623	33	2,145	27	20
クルグアイ	281	4	191	2	- 32
バウグアイ	59	1	236	3	299
計 (A)	7,878	100	8,510	100	8
世界計 (B)	23,864	-	22,514	-	- 6
A/B	3.30	-	3.78	-	-
生産量					
1,000t	%	1,000t	%	%	
アムセバシ	7,752	74	10,188	64	31
ブラスル	2,246	22	9,809	30	114
クルグアイ	375	4	421	3	12
バウグアイ	63	1	473	3	656
計 (A)	10,436	100	15,891	100	52
世界計 (B)	46,468	-	54,794	-	19
A/B	2.26	-	2.90	-	-
収 収					
Kg/ha	X16JZ-W10 比較 (%)	Kg/ha	X16JZ-W10 比較 (%)	(%)	
アムセバシ	1,587	20	1,887	1	19
ブラスル	887	- 33	1,506	-19	70
クルグアイ	1,335	1	2,176	17	63
バウグアイ	1,047	- 21	2,006	7	92
計 (A)	1,325	-	1,867	-	41
世界計 (B)	1,935	-	2,431	-	26
A/B	- 31.5	-	- 23.2	-	-
消費量					
1,000t	%	1,000t	%	%	
アムセバシ	3,804	35	5,563	29	46
ブラスル	4,694	61	6,297	50	- 6
クルグアイ	291	3	315	2	8
バウグアイ	148	1	475	4	222
計 (A)	10,936	100	12,650	100	16
世界計 (B)	46,156	-	54,763	-	19
A/B	3.37	-	2.31	-	-
輸出量					
1,000t	%	1,000t	%	%	
アムセバシ	3,949	98	4,625	98	17
ブラスル	1	0	1	0	33
クルグアイ	87	2	112	2	29
バウグアイ	0	0	0	0	-
計 (A)	4,036	100	4,738	100	17
世界計 (B)	10,328	-	11,222	-	8
A/B	3.91	-	4.26	-	-

出所: FAO

輸出品	1000ト	%	1000ト	%	%
・P.V.C	0	0	0	0	0
ブ>VU	4,409	98	1,489	99.	- 67
シリコン	2	0	6	0	143.
その他	85	2	3	0	- 97
計 (A)	4,536	100	1,498	100	- 67
計 (B)	102,177	-	111,043	-	8
%	4.40	-	1.35	-	-

出所: FAO

輸出品は、国内市場で消費されるものと、海外市場に輸出されるものとに分かれる。P.V.Cは、国内市場で消費されるものと、海外市場に輸出されるものとに分かれる。P.V.Cは、国内市場で消費されるものと、海外市場に輸出されるものとに分かれる。

P.V.Cの輸出は、国内市場で消費されるものと、海外市場に輸出されるものとに分かれる。P.V.Cの輸出は、国内市場で消費されるものと、海外市場に輸出されるものとに分かれる。P.V.Cの輸出は、国内市場で消費されるものと、海外市場に輸出されるものとに分かれる。

表 14

小計: P.V.Cの輸出先国

1000ト

輸出先国	1987	1988	1989	1990	1991
ブ>VU	1,063.9	928.9	1,635.9	1,819.3	2,889.0
その他	413.3	440.0	478.3	307.1	562.6
中国	808.9	304.1	113.1	749.8	440.9
インドネシア	240.7	190.2	10.0	308.2	375.6
イタリヤ	496.6	722.6	659.6	1,469.7	359.5
フィリピン	2.5	90.8	49.8	118.8	168.9
タイ	23.7	23.5	8.7	1.5	148.2
ミャンマー	-	-	-	104.3	193.1
コロンビア	-	62.4	99.5	11.4	58.9
日本	541.1	632.4	609.1	466.1	31.7
トルコ	-	-	69.7	449.6	-
その他	606.7	221.0	616.9	59.5	307.0
計	4,197.9	3,671.9	4,351.6	5,847.4	5,544.4

出所: UNCTAD

国内市場への出荷は、総出荷量の大部分を占めています。輸出先国は、中国、日本、インドネシア、タイ、フィリピン、ミャンマー、コロンビア、トルコ、その他です。

輸出は平均より、80年代は、90年代始めは約4200万ト前後である。

表 15 小計: PIVUの傾向 1,000ト

年度	国内生産量	工場の出荷量	輸出量
1986/87	9,000	9,065	9,030
87/88	9,000	3,957	7,197
88/89	8,360	3,900	3,905
89/90	10,298	9,136	9,952
90/91	10,959	9,131	5,866
91/92	9,204	9,313	5,544

出所: NUMERO ESTADISTICO.

市場への出荷は、2月と3月は、約4200トの収量時期を中心として、10月半期に集中する傾向がある。これは最近では、収量時期の出荷集中度が低くなり、販売時期が拡大されたこと、このことの原因は、次のとおりである。

- ・ 輸出先国の多様化により、右様子の時期も従来のように10月半期に集中せず、長期にわたる時期に及ぶ。中でも最大の輸出先市場である中国の輸入自由化、各種規制の緩和が影響している。
- ・ 生産者の競争能力の増加、中でも生産中心地であるプエリス、ピウス南部地方の競争能力の拡大は、市場の好意を得た上、生産能力の向上による。
- ・ 1990年以降、プエリス、ピウスとロサリオ両取引市場は、約4200トの建築物資の輸入先を取引量は基本的に増大している。

輸出先市場の80年代は、基本的な変化がなかった。これは、相対的にECの補助金輸出に利用する速度や中国の輸入の減少と、反面、南米諸国、中でも近隣諸国の輸出が増加している。PIVUの輸出は、60%を占めることになっている。

1.2.1 国際市場動向

とりもろくは南米途上国における米と小麦の次に基礎食糧とされている先進国を含む世界の全体の消費は 2億5千万トンの食用とす。残りは家畜飼料として消費されている。

飼料用作物の中で小麦が最大の消費量であるが、これは20年間以上の栽培技術の向上による収量の増加による比率が高まっている。91/92年度における世界の小麦の生産量は980万トンを達し、飼料用作物供給量の50%以上を占めた。この飼料用作物のうちの比率は輸出の割合は更に高く、世界の輸出の70%に相当する600万トンを達している。

世界の小麦市場は 2億5千万トンのうち一部は国内消費し、残りの輸出余力は特定の国に限定される傾向がある。中でも米国のとりもろく生産量は世界の40%以上、輸出の70%以上を占める。小麦は小麦の最大の生産国であるが、国内消費が大きいので、輸出余力は生産量に対してそれほど大きくない。また、アジアの市場への供給国の立場にあり、アジアの市場への需要比率は、生産量に対して2割、輸出量に対して9%である。

表 1 世界のとりもろく市場

国別	生産		輸出	
	100万ト	%	100万ト	%
米 国	189.9	39.6	99.0	66.3
中 国	95.0	19.8	8.0	13.3
EU諸国	10.5	2.2	5.9	9.2
その他	184.3	38.4	64	19.6
世界計	479.7	100.0	146.9	100.0

出所 USA

高率で全般的に、一国的な集中傾向があるが、世界の消費国の中で1日1億人の人口を擁する中国は例外である。中国は大豆の消費国であるが、輸入は減少傾向にあり、76/77年度は150万トンの輸入を行っていたが、今日では300万トンを消費する国内生産の拡大が認められる。中国は林用と共通農業政策により、飼料用作物の生産奨励と炭化水素補助を行っており、結果的に、

80年代前半は世界の供給量増加率と消費量増加率とを比べると、中国は世界の在庫を増加し、価格を低下させたことがあり、20億 1982/83年の在庫と消費量比率は80年代前半よりも高く、価格は最低を記録した年であった。

表 17

とらぶろ : 手取の採出入

国別	1987/88	88/89	89/90	90/91	91/92
(輸出国)					
米 国	49.5	51.3	60.0	44.5	49.0
ソビエト連邦	3.7	2.5	2.5	3.7	5.9
中 国	9.1	3.7	2.5	6.6	8.0
南アフリカ連邦	0.6	2.0	3.5	9.8	9.8
其 他	9.7	1.4	1.3	1.3	9.8
計	3.1	2.9	3.1	3.2	9.8
(輸入国)	56.7	63.8	72.9	69.1	69.3
(輸入国)	6.5	3.9	3.4	6.2	9.8
日 本	16.7	15.9	16.0	16.0	16.2
中 国	8.1	19.5	19.4	11.5	11.3
韓 国	5.0	5.7	6.1	5.6	6.0
タイ	3.2	3.2	5.0	1.8	1.0
インドネシア	3.7	2.9	4.1	3.7	2.0
合 計	4.2	9.2	5.3	5.3	5.7
其 他	16.2	13.9	18.9	16.2	18.1
計	57.1	65.3	74.8	69.1	69.3

出所: USDA

表 18

とらぶろ : 手取の供給

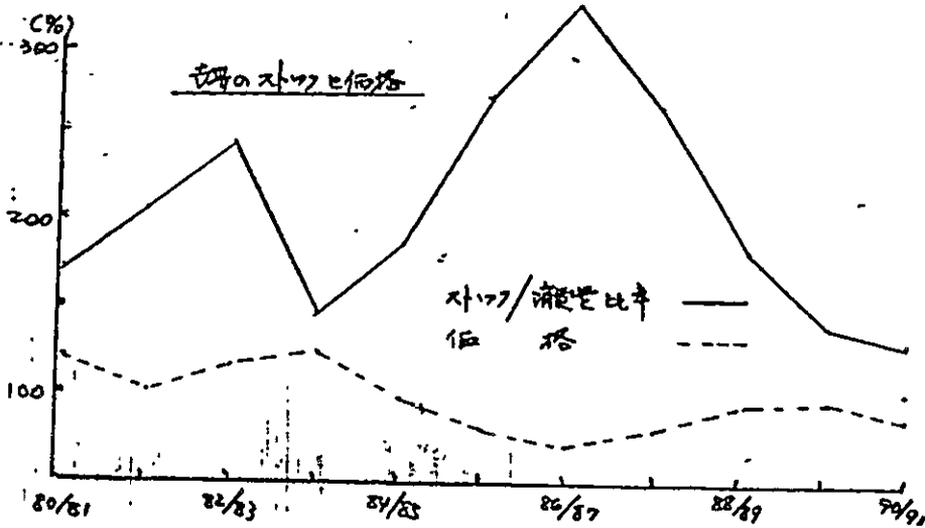
100万t

年度	期首在庫	生産量	計	消費量	輸出品	期末在庫	変化/前年度
1982/83	70.0	408.6	508.6	417.9	63.4	106.8	25.6
83/84	106.8	346.1	452.9	412.8	69.7	49.1	9.7
84/85	49.1	457.1	497.2	436.4	66.7	69.8	13.9
85/86	69.8	489.0	549.8	420.1	53.8	121.4	28.9
86/87	121.4	474.3	595.7	459.9	59.4	161.0	35.2
87/88	161.0	419.1	610.1	464.2	59.7	149.0	31.5
88/89	149.0	409.3	549.3	459.4	63.8	87.0	18.9
89/90	87.0	469.2	547.2	476.3	72.9	79.9	14.9
90/91	79.9	477.6	548.5	464.7	69.1	81.9	17.5
91/92	81.9	462.0	543.9	479.7	74.8	-	14.8

出所: USDA

手取のとらぶろ供給の一部は同じ品種の輸入品に比べて供給の柔軟性が高い。この国は
 政策の変更と同様に、大豆の供給は、80年代には大豆の供給の増加に
 12 83/84 及び 88/89 年に相対的に大豆の供給の減少が、同様に大豆の供給
 量は、1985 年に相対的に大豆の供給の増加に、とらぶろの供給

抑制する。この国際相場の上昇の要因となる。90年代におけるこの世界の需要は、
 対する自国の割合は16%前後で、80年代に達して35%と大に下回っている。



現在の世界における市場の状況は次の通りである。

- 供給と需要の均衡が保たれ、価格は、数年間上昇傾向にある。
- 世界の生産と輸出は依然として少数の国に集中している。
- 世界の取引におけるこの商品の割合は、小売の割合よりも大に補助の向きの正味の
 11%の差をこの世界の生産の増加と見なす反面、飼料部門の補助の減少による国の輸入減
 少傾向が明らかになっている。

今後の市場状況として、主要な国々の飼料作物全体の今後における供給と需要の

この商品の飼料作物に必要とする割合は、飼料作物全体の需要に順応するものと
 考えられる。

上記主要国の需要と供給は90年代における生産の増加率、80年代よりも増加率が消費
 量も増加するとの見込みが均衡すると思われる。消費の増加に伴って輸出も増加する見
 込められている。更に、GATTのジュネーブにおける農業部門交渉、特に補助の削減と
 国の生産の減少と見込める。この市場の有利に反映すると思われる。

表 19 飼料作物の政策手続 (%)

区分	1970/80	1980/90	1990/2000
生産	2.6	1.2	2.0
消費	2.6	1.4	1.9
輸出	8.6	0.3	2.9

出典: BANCO MUNDIAL

1.2 XUV2-10の貿易状況

XUV2-10におけるとりわけ市場のプルゼンへの唯一の輸出国とし、フランスは最大の産国かつ消費国として、英米小国の場合に類似しているが、フランスの輸入は国産品の規模に応じて上下の差が大きい。小国は常に恒常的に大型輸入であることが異なっている。又フランス全体は国内消費量に比べて地域別に供給が不足する場合、特に東北地域は国産の中央部の供給が不足するが、同様の輸入する方が少ないことが、いづれにしてもフランスは世界的な産国でありながら、輸出余力は皆無である。

フランスの産国 XUV2-10 全体の 3% 程度でありながら、国内産量は国内消費量に略等しいため、輸入は行わずに利益。これは我が国の産量も少なく、国内消費に足りないため少量の輸入に依っている。

XUV2-10 全体の産国は、産国消費の 6%、産国輸出の 4% に過ぎない。産国輸入は産国利益の僅少である。

過去 10 年間の推移をみると、プルゼンへの栽培面積が 10% 減少しているが、フランスの栽培面積が 10% 増加している。全体の生産性は、フランス消費の大半は国内産品からの消費が大きい。これは、とりわけ飼料の生産と消費の世界的な輸出国である。

XUV2-10 国の生産状況をみると、プルゼンへの栽培は明らかに有利である。プルゼンへの肥料と農薬の使用量が低いことが、フランスに比べて生産コストが低く、かつ 1ヘクタール当たりの収量がプルゼンに比べて高い状況にある。これは、フランスに比べて、とりわけ過去 5 年間の平均収量がフランスの 2.850 kg/ha に比べて、プルゼンでは 5.150 kg/ha である。

とりわけ飼料と配合飼料の生産に、XUV2-10 国は充足した市場開拓面をもち、大規模な期待が寄せられている。これは、プルゼンへの配合飼料の生産に、消費規模の大きいフランスの養肉部門と市場の 1/3 程度の生産性をもち、その期待が大きい。これは、産国の中で人件費と燃料費がフランスに比べて高いという点がある。

メロコニウ園地唯一の輸出地である。沖を主要輸出産物の1つとして、アセ
ンチの生産と市場は地を通うである

アセンチの輸出状況

輸出はアセンチ産物である最大の飼料作物で、同様にホウレンソウ飼料作物全体の
70%、穀類生産の18%を占める。輸出は春から夏にかけて行われ、この産地帯
はパニエ地帯の全域に広がるが中でもアリス・アリス川、アリス川南部、コルマ川東
部及びラ・パニエ川が産地帯の中心地帯である。播種は9~11月、収穫は3~5月に行われる。

表 20 アセンチの輸出状況

州別	1982/84 平均		1989/91 平均	
	面積 (1000ha)	比率 (%)	面積 (1000ha)	比率 (%)
アリス・アリス	1,031.2	31.1	843.3	38.9
コルマ川	816.6	24.7	665.3	21.2
ラ・パニエ	521.6	15.7	321.0	14.6
アセンチ	249.0	7.5	244.8	11.1
その他	691.0	20.9	319.7	14.6
計	3,308.4	100.0	2,194.1	100.0

出典: JNF

上述の通り、アリス・アリス川は全国産量の3分の1以上を占め、沖を産地帯、コルマ川、ラ・パニエ
川は全国的に栽培面積の75%に相当する。栽培面積は大豆の栽培面積の直接の競争を減少
傾向を促す。また、産地帯は新品種の導入も進んでおり、1ha当りの収量は80年代前半の
3000kgから、現在4,200~4,500kgに達している。

表 21 アセンチの栽培状況

項目	77/81	90/91
作付面積 1000ha	5,400	2,400
収量 1ha 99/ha	32.8	43.9
生産量 1000t	9,500	8,800

出典: JNF

このように、沖の大豆は向いており、沖の大豆の7t/haと比較しては3分の1程度、11%
程度の余力を残している。これは示している。

表 22 輸出産物の単収比較

国別	1989/90	1990/91	1991/92
米	7.32	7.44	6.82
中国	2.88	2.52	2.58
アセンチ	3.06	2.00	2.38
アセ	2.93	2.81	2.73

出典: USDA

生産物の仕向先

海外市場への輸土量は国内生産と消費量の規模によって決定する。国内での工業用、飼料用穀物、及び農産物による消費される。91/92年度におけるトルセルタへの輸出量は約6,500千トンの600千トンに減少した。この全額は穀類輸土額14%、輸出総額5~7%に相当するものを見られる。輸出品目も減少した。

トルセルタへの輸出市場は一進一退を繰り返してきた。昔はECに最大の輸土先市場としていたが80年代にECが採用した国内への飼料作物生産の増加計画により海外依存を減少した。これは代って、国際的、政治情勢の理由として、Y連や他の買付の増加した時期もあつた。90年代に入ると新しい市場の出現による輸土先の変化が続いている。

表 23 トルセルタへの輸出先市場 (%)

国別	1984/85	1990/91
旧ソ連	31	0
EC	20	14
イタリヤ	11	19
オーストラリア	5	0
ブラジル	0	5
ペルー	0	8
エジプト	0	3
その他	33	51
計	100	100

出所: S.A.O.P

国内市場における工業用と飼料消費量は年間の平均1.5~1.8百万トンである。又農産物による畜産飼料と飼料消費は2.5~3.0百万トンの範囲で推定される。

表 24 トルセルタへの輸出先市場 (91/92年度)

区分	数量 1000t	比率 (%)
生産量	10,500	100.0
輸土量	6,500	62.0
種子使用量	50	0.5
工業原料		
配合飼料	900	8.5
澱粉化	700	6.6
穀物	150	1.4
農産物の消費	2,200	21.0

出所: S.A.O.P

表 25

とびきり: XNUMX 統計

国 別	1986	1987	1988	1989	1990
1) 収量面積 1,000ha					
TIVVTV	3351	2,900	2,438	1,520	1,826
ブツニ	12,460	13,503	13,182	12,919	11,395
ツルグア	96	88	79	99	61
バツグア	376	567	486	500	518
XNUMX	14,263	17,058	16,180	14,988	13,600
ナリ -	105	87	90	125	101
ホリビ	320	302	293	279	261
計	16,688	17,447	16,563	15,392	13,962
世界計	128,337	125,983	127,378	129,298	129,116
2) 生産量 1,000t					
TIVVTV	12,400	9,250	9,200	9,260	5,049
ブツニ	29,541	26,803	24,748	26,590	21,298
ツルグア	92	104	118	60	112
バツグア	962	1,001	961	1,000	1,139
XNUMX	33,502	37,158	35,027	31,910	27,598
ナリ -	721	617	661	938	823
ホリビ	538	481	456	375	325
計	34,761	38,256	36,144	33,223	28,746
世界計	485,066	458,028	400,263	470,646	475,429
3) 生産性 kg/m					
TIVVTV	3,700	3,190	3,774	2,803	3,105
ブツニ	1,649	1,985	1,877	2,058	1,869
ツルグア	1,200	1,185	1,592	1,228	1,667
バツグア	1,245	1,766	1,978	2,002	2,200
XNUMX	1,949	2,032	2,305	2,023	2,210
ナリ -	6,886	7,121	7,318	7,529	8,140
ホリビ	1,880	1,591	1,553	1,344	1,245
計	2,727	2,806	3,015	2,827	3,038
世界計	3,780	3,636	3,142	3,640	3,682
4) 消費量 1,000t					
TIVVTV	5,027	5,264	4,984	2,358	2,031
ブツニ	22,766	27,673	24,779	26,796	21,997
ツルグア	112	161	152	119	152
バツグア	469	1,001	961	996	1,137
XNUMX	28,374	34,099	30,876	30,269	25,337
ナリ -	775	753	872	1,002	905
ホリビ	538	482	758	368	303
計	29,687	35,334	32,206	31,639	26,545
世界計	485,972	458,112	400,149	469,846	477,966

出所: FAO.

表 26

輸出額 : XILVX-W の輸出状況

国別	1986	1987	1988	1989	1990
1) 輸 出					
PIWVIV	2,374	3,987	4,217	1,903	2,998
73VIV	0	1	1	0	0
7IV7I	0	0	5	0	0
1737I	0	0	0	4	2
XILVX	2,374	3,988	4,223	1,907	3,000
7II-	0	0	3	19	8
7IV7	0	0	0	7	2
計	2,374	3,988	4,226	1,933	3,030
合計	57,641	64,445	66,486	77,253	71,264
2) 輸 入					
PIWVIV	1	1	1	1	0
73VIV	2,225	871	32	206	699
7IV7I	20	57	39	59	40
1737I	0	0	0	0	0
XILVX	2,246	929	72	266	739
7II-	54	136	214	83	90
7IV7	0	1	2	0	0
計	2,300	1,066	288	349	829
合計	58,547	64,529	66,378	76,953	73,801

出所: FAO

2. 油脂原料作物

2.1 大豆

2.1.1 国际市场动向

1991/92 麦季に於ける世界の大豆生産量は、105.7 百万トンを推定される。このうち世界の 8 大油脂作物（大豆、棉、落花生、ヒマワリ、菜種、亚麻、ココヤシ及びアブラムシ）生産量の 50% に相当する。

大豆の搾油率の上昇に伴って大豆油の食用用途、又その副産物としての大豆粕は飼料原料として用いられる。大豆は他の油脂原料作物より蛋白質含有率が高く、粕の歩留りも高い。大豆の油の割合と生産量は他の作物に劣る。世界の平均として大豆の搾油歩留率は油が 15%、大豆粕が 67% である標準である。

表 27 8 大油脂作物と大豆の油及び粕の歩留り %

品名	1987/90	1990/91	1991/92
大豆油	14.8	15.2	15.6
8 大油脂平均	21.2	21.2	21.1
大豆粕	64.9	66.7	67.1
8 大油脂平均	52.1	52.4	52.7

出所: FAO

油脂原料作物別の油及び粕の生産割合は、油では大豆 27%、アブラムシ 19%、菜種 16%、ヒマワリ 12%、棉 7%、粕では大豆 57%、菜種 13%、棉 11%、ヒマワリ 7% の割合である。このうち大豆の生産量の割合は大豆の 40%、大豆粕は搾油歩留率の 57% に相当する。1992 麦季に於いては 71.6 百万トンの生産が行われた。これは世界の食油の割合は大豆の比率は 27% に相当し、大豆生産は 91/92 麦季に於いて 165 百万トンを示した。

世界の大豆生産量は 67~77 年間は 47% の大中規模に集中し、77~87 年間は 4.7% の増産に上った。生産量は 67~77 年間は 32% 向上した。77-86 年間は 18% の上昇を示した。

世界の生産量の中核を担っているのは大豆、ヒマワリ及びアブラムシである。世界の生産量は 20 年間、大豆は倍増した。1967 年に世界の大豆生産量は 65 万トンであったが 87 年には 53 万トン減少した。ヒマワリの生産量は 172 万トン、アブラムシは 25 万トン、712 万トンの生産を示した。

表 28

20年間の大豆生産の推移

国	面積 (100万ha)			生産量 (100万t)			収収 t/ha		
	1967	1977	1987	1967	1977	1987	1967	1977	1987
大陸別									
アメリカ	31.7	32.8	38.2	39.2	64.0	80.1	1.2	1.9	2.1
ソ連	1.6	15.9	12.0	1.2	14.7	15.4	0.7	0.9	1.3
ヨーロッパ	0.1	0.3	1.0	0.1	0.4	2.4	0.9	1.3	1.3
その他	0.1	0.2	0.4	0.1	0.1	0.4	0.7	0.6	1.0
計	33.5	49.2	51.6	40.6	79.2	98.3	1.2	1.6	1.9
地域別									
米国	16.1	23.3	22.8	26.5	47.9	51.8	1.6	2.1	2.3
ブラジル	0.6	2.0	2.2	0.7	12.5	16.9	1.8	1.8	1.8
中国	14.0	14.2	8.4	11.1	12.9	11.8	0.8	0.9	1.4
その他	0.1	0.7	2.2	0.1	1.4	7.8	1.2	2.1	2.0

出所: FAO

大豆の産地は、20年間の間に減少した。そのうちブラジルとアメリカの増加が著しく、そのうち南米が世界でもっとも急速に生産を拡大した地域となっている。一方、アメリカの大豆の増産は、大豆の需要が伸びたことによる生産増産からなっている。

21年間の間に大豆の生産が低下したのは、米国の農業政策の中で、穀物の生産に奨励金が与えられたことによる。また、大豆の生産に有利な価格政策を実施したためである。この結果、米国の大豆生産は、1970年代前半に大豆栽培を拡大させた大豆の理由の一つとなっている。ブラジルとアメリカに生産増産の15%が追加された。80年代前半は、15%の増産が、今日まで世界の大豆の30%を占めることとなっている。

表 29

大豆: 世界の生産推移

100万t

年度	米国	ブラジル	中国	アメリカ	その他	計
1982/83	59.6	14.8	9.0	42	60	93.6
83/84	49.5	15.5	9.8	20	64	83.2
84/85	50.6	18.3	9.7	6.8	26	93.0
85/86	57.1	14.1	19.5	20	8.0	97.0
86/87	52.8	17.3	11.6	20	8.3	98.0
87/88	52.8	18.1	12.5	9.7	10.7	103.8
88/89	42.2	23.2	11.7	6.5	12.1	95.6
89/90	52.4	20.3	19.2	19.8	13.4	107.1
90/91	52.4	15.5	11.0	10.8	13.3	103.0
91/92	54.0	18.5	9.6	10.5	13.3	105.7

出所: USDA

表 31

大豆油：世界の需給

年度	期首在庫	生産量	計	消費量	輸出量	期末在庫	対需/消費 (%)
1982/83	10.5	13.6	24.1	13.3	3.8	1.5	11.6
83/84	11.6	12.8	24.4	13.0	4.0	1.3	9.8
84/85	9.8	13.3	23.1	13.1	3.7	1.4	10.6
85/86	10.4	13.9	24.3	13.5	3.2	1.7	12.2
86/87	12.2	15.2	27.4	14.8	3.9	2.0	13.4
87/88	2.0	15.2	17.2	15.0	3.8	2.1	14.0
88/89	2.1	14.6	16.7	14.8	3.7	1.7	11.5
89/90	1.7	15.9	17.5	15.6	4.0	1.8	11.5
90/91	1.8	15.9	17.7	15.9	4.6	1.8	11.3
91/92	1.8	16.5	18.3	16.0	3.8	2.0	12.8

出所：USDA.

表 32

大豆油：世界の需給

年度	期首在庫	生産量	計	消費量	輸出量	期末在庫	対需/消費 (%)
1982/83	2.8	60.5	63.3	59.8	23.3	2.5	9.2
83/84	2.5	55.2	57.7	55.6	21.4	3.1	5.6
84/85	3.1	58.1	61.2	59.0	22.3	2.7	9.6
85/86	2.7	61.1	63.8	61.8	23.1	2.9	4.6
86/87	2.9	67.2	70.1	67.6	26.0	3.1	9.6
87/88	3.1	67.6	70.7	67.6	25.2	3.5	5.2
88/89	5.2	63.9	69.1	65.9	24.8	3.2	9.9
89/90	3.2	69.5	72.7	69.1	26.1	4.0	5.8
90/91	4.1	69.7	73.8	70.9	26.7	3.7	5.2
91/92	3.8	71.6	75.4	72.4	26.9	3.3	4.6

出所：USDA

国際市場における大豆の供給は地理的に異なり、その地域は行方不明である。一方にはブラジルとアメリカの供給は、その四半期に行方不明の粗い大豆の生産開始と共に供給を開始する。その三大供給国の中でアメリカは大豆油、ブラジルは大豆粕、中国は大豆(豆)の最大の供給国である。大豆及び副産物の輸出は民間部門による行動であるが、政府特許の関与がある。需要例としては日本やECにおける大豆(豆)及び大豆粕の輸入は民間部門による行動である。大豆油の場合、国内の供給は不足が生ずる場合、政府が介入する可能性がある。大豆油の取引は、その補給の不足と損失の融資の取戻しである。中国はEGP(輸出保証プログラム)のECにおける農業補助金の代表的例である。

大豆、大豆油及び大豆粕の世界の諸輸出国及び諸輸入国の過去55年間の比較は、後述の通りである。

表 33

大豆(豆)：世界の産出国及び輸入国

100万ト

国別	1987/88	88/89	89/90	90/91	91/92
(輸出国)					
米 国	21.9	14.4	17.0	15.2	18.8
ブラジル	2.7	9.8	3.9	2.6	3.0
アルゼンチン	2.1	0.5	3.1	9.9	2.7
パナマ	1.3	2.0	1.6	1.0	1.5
中国	1.5	1.2	1.1	1.0	0.8
その他	0.6	0.7	0.7	0.9	0.6
計	30.1	23.5	27.4	25.0	27.1
(輸入国)					
E C	13.6	11.1	13.3	12.9	13.3
日本	4.8	4.3	4.7	9.9	4.6
台湾	2.1	1.7	2.1	2.0	1.9
C E I	1.4	0.7	0.7	0.6	0.8
その他	7.2	6.0	6.0	6.1	2.3
計	29.1	23.7	26.7	25.9	22.9

出所: USDA

表 34

大豆油：世界の産出国及び輸入国

国別	1987/88	88/89	89/90	90/91	91/92
(輸出国)					
米 国	0.9	0.8	0.6	0.4	0.7
ブラジル	0.6	0.7	0.9	0.7	0.5
アルゼンチン	0.8	1.0	1.0	1.1	1.2
E C	1.2	1.0	1.1	1.1	1.3
その他	0.3	0.3	0.3	0.4	0.4
計	3.8	3.7	3.9	3.6	3.9
(輸入国)					
E C	0.5	0.5	0.5	0.6	0.6
米 国	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0
インド	0.4	0.0	0.0	0.0	0.1
中国	0.2	0.4	0.5	0.5	0.4
フィリピン	0.7	0.8	1.0	0.9	1.0
その他	1.7	1.7	2.0	1.8	1.7
計	3.6	3.5	4.0	3.8	3.8

出所: USDA

表 35

大豆粕：世界の産出国及び輸入国

100万ト

国別	1987/88	88/89	89/90	90/91	91/92
(輸出国)					
ブラジル	7.3	8.7	9.9	8.2	7.7
米 国	4.2	4.9	4.3	5.0	5.8
アルゼンチン	4.0	4.8	4.8	5.6	6.1
E C	3.8	3.5	3.8	3.7	3.7

中国	2.3	1.6	1.6	2.3	1.5
其他	1.0	1.5	1.7	2.1	2.2
計	24.6	25.0	26.0	26.8	27.0
(輸入国)					
E C	12.6	12.1	13.4	13.9	13.6
C E 1	3.0	4.0	2.6	3.0	3.0
東ヨーロッパ	2.8	3.1	2.8	2.9	2.8
ソ連	2.3	2.3	2.4	3.2	3.0
トルコ	1.8	1.8	2.1	1.8	1.9
その他	1.5	1.5	1.3	1.5	1.5
計	25.3	26.4	25.9	27.7	27.1

出所: USDA.

国際市場の動きの中で、1980年代の崩壊後、主要産国が大豆及び大豆粕の需要を補うべく、莫大の大豆市場に走った。又 EC での大豆及び副産物の輸入に注力し、大豆及び大豆粕の輸入に積極的。大豆油は既に 10% の課税措置にとどまっている。

現在の国際大豆市場の動向は次の通りである。

- 1) 米国の農業政策は大豆の生産の増加を促す。同国の穀類生産は大豆の増加比率は低いため。その後 1990 年の農業法改正で従来の措置の一部を改正し大豆増産を促す。補助金の改善に伴い EEC 市場の中で大豆油の含油量は比較的高い価格で取引される。
- 2) 南米大陸は大豆の増産は大豆油の増産と共に輸出増大も出現している。南米の供給国として世界の規模を拡大する。ブラジルとパラグアイを中心とし、小規模ながら大豆の生産国として、この国の大豆は XEROX の産国である。このパラグアイは大豆油の増産。又パラグアイは大豆粕の増産も国際市場価格に影響する輸出規模も存在する。
- 3) 大豆の価格決定は大豆の増産と大豆粕の取引量の最近数年の増大傾向にある。1980年代の政治的、経済的危機の一部は大豆問題の影響による。

国際市場の見通し。

国際市場は大豆の増産の見通し。油脂作物全体の市場は関連している。植物油及び粕の需要は人口の増加、所得の向上、低所得層の食習慣の変化によって大きく影響する。世界の人口、動物蛋白消費量の増加に伴い大豆の需要も増加、かつ経済的な高い先進国諸国では既に飽和状態の消費レベルに達している。健康と長寿のため栄養という面から動物蛋白の利用

に減少したとの見解がある。

他方、世界の人口の80%は蛋白質を食品として消費する。肉類消費の増加傾向は、韓国と台湾と並び消費の増加傾向がみられるが、中国や旧ソ連国と並び肉類消費の増加傾向が顕著なところから、蛋白質含有大豆の需要は年々増加するものと思われる。肉類消費の増加は、肉類消費の増加と並行して大豆の消費も急速に増加するとの見解がある。90年代は世界の大豆需要の中心は依然として部分的に変化することはあり得るが、大豆需要の急激な増加は、大豆の生産に支障をきたすことは少ない。

大豆の需要増加の期待は、大豆の生産の増加と並行して大豆の生産方法の改良による大豆の利用率の向上によるものと見られる。ECの場合には大豆の生産と並行して大豆の利用率の向上が期待される。また、大豆の生産の増加は、大豆の生産の増加と並行して大豆の利用率の向上が期待される。また、大豆の生産の増加は、大豆の生産の増加と並行して大豆の利用率の向上が期待される。

大豆の生産の増加は、大豆の生産の増加と並行して大豆の利用率の向上が期待される。また、大豆の生産の増加は、大豆の生産の増加と並行して大豆の利用率の向上が期待される。また、大豆の生産の増加は、大豆の生産の増加と並行して大豆の利用率の向上が期待される。

大豆の世界市場は、大豆の生産の増加と並行して大豆の利用率の向上が期待される。また、大豆の生産の増加は、大豆の生産の増加と並行して大豆の利用率の向上が期待される。また、大豆の生産の増加は、大豆の生産の増加と並行して大豆の利用率の向上が期待される。

表 36 世界の大豆市場、年別成長率 (%)

	1970/80	1980/90	1990/2000
生産	6.9	1.8	2.8
消費	6.2	2.2	2.9
輸出	9.9	2.5	1.7

出所：豆類

2.1.2 X1002-10 に於ける大豆市場

1) 概要

1992/93年度における世界の大豆生産量は117億トンと推定され、93/94年度は110億トンと推定される。

世界の生産の中からは、米国の生産が最も多い。92/93 農年における世界の生産の50%を占める。ブルゴリア、ブラジル、ウルグアイ及びパラグアイは構成国としての生産は2-10%の合計で35億トンの生産にあり、世界の生産の30%を占めている。93/94 農年における米国の生産は減少すると予想されているが、ブラジル及びブルゴリアの生産は増加を期待しているから、世界の大豆生産には50%の生産の比率は増大が見込まれる。相対的にブラジル及びパラグアイの中国の生産は左側の中核として、この国の消費の拡大は輸出余力が少なく、他の3国とは異なる立場にある。

大豆の副産物の中、大豆油の場合、生産の世界的生産に占める比率は92年度は約25%、世界の貿易量に占める比率は50%である。大豆粕は約世界の生産量及び貿易量に占める大豆油の場合と同様の比率を有している。

生産の世界的生産の油脂原料作物の中で大豆は次に重要な作物と見做され、世界の生産に占める比率は原料、油及び粕の11のうち約18%である。生産の世界的生産の油脂原料作物の輸出を行なっているのは、世界の貿易量に占める油は約50%、粕は約66%を占めることから、国際価格も左右する力を持っている。

麻の肉は麻油の需要の石油副産物に押されている生産は低調である。生産の世界的生産に占める比率は低く、油に4%限られた高価格の生産。生産の世界的生産の麻の肉はブラジル及びパラグアイの生産国としての高生産は約同様の傾向にある。

世界の油脂作物の中で大豆油は最も多い。最も重要な作物はオリーブである。その生産は増加傾向にある。

2) 生産の世界的生産の油脂原料作物部門

生産の世界的生産の構成国の中で最大の大豆生産国はブラジルで、92/93 農年における2億5千万トンの生産にあり、93/94 農年の収穫は史上最高の2億7千万トンを予想されている。10%最近数年間の成長率は停滞しており、80-92年間の生産増加分は生産の世界的生産の11%を占める。これはブラジルの6%に過ぎず、この間に最高の成長を示したパラグアイの22%と比較的である。

大豆油の肉はパラグアイ及びブラジルの合計で生産の世界的生産の99%を占める。この部門は約10%の過去5年平均の生産増加分はパラグアイは約最も多い。ブラジルの生産は約10%の世界的生産の増加分は、この部門は世界の生産の最も多い生産を増加している地域である。

オリーブの生産市場動向は次の通りである。

(1) 大豆の生産

大豆は、Tibetの最大の油料作物であり、国内の油料作物に占める割合は、大豆の生産量の60~70%の国内生産、又は大豆の生産量の30%に占める。

表 27 Tibetの大豆生産と国内大豆の割合 %

年 度	作付面積	生産量
1980年代平均	17.6	20.2
1981/82	10.1	12.4
1991/92	24.1	28.3

出所: SAGP

Tibetの大豆栽培は70年代の中期から拡大を始め、70年代後半には、大豆の栽培が主要な作物となり、80年代に入ると、さらに拡大し、80年代の前半には、大豆の栽培が最大の栽培作物となった。品種の改良や栽培技術の向上により、国内の各地に大豆の栽培が普及し、大豆の栽培面積は拡大し続けている。

表 28 大豆: Tibetの大豆生産統計

年 度	作付面積 1000ha	収穫面積 1000ha	生産量 1000t	収率 t/ha
1980/81	1,777.3	1,733.7	3,578.5	2.064
81/82	2,109.2	2,057.5	4,258.7	2.069
82/83	2,201.9	2,103.3	3,648.6	1.734
83/84	2,761.0	2,746.0	6,883.1	2.506
84/85	3,402.4	3,381.2	6,560.5	1.940
85/86	3,375.8	3,333.7	7,055.2	2.116
86/87	3,554.9	3,448.4	6,628.6	1.922
87/88	4,208.7	4,156.5	9,558.3	2.299
88/89	4,716.8	3,944.0	6,526.8	1.655
89/90	5,093.2	4,918.6	10,666.7	2.169
90/91	4,966.9	4,782.5	10,873.5	2.274

出所: JUS - SAGP

輸出面積は、大豆の生産量の約70%に占められ、大豆の生産量の90%は輸出用に用いられる。大豆の輸出は、副産物の大豆粕も輸出される。大豆の輸出は、大豆の最大の産地である。

大豆の輸出は、大豆の最大の産地である。大豆の輸出は、大豆の最大の産地である。

大豆の割合が高、減少してきて、この政策は原料の輸入輸出も加えて価格の値
 の輸出に頼つてきたのが、ECが大豆の両作物に課税して課税輸入税は53コシ、高と相殺
 大豆の割合が低、この関係は大豆の1983年以降減少して、84年に15%、今日では
 大豆の割合が低、この関係は大豆の1983年以降減少して、84年に15%、今日では

大豆の栽培地帯

大豆の栽培地帯は大豆栽培の10%の地帯で、直径250kmの円形の面積で行なわれる。
 この地帯は、フランス、ドイツ、及びイタリアの各州で合算されており、この3州の国内生産
 量の93%を占める。この中心地帯はドイツの市である。この栽培地帯は大豆と穀物と
 との割合は、大豆の市況に依りて変動する。

表 39 TUVVに於ける大豆栽培地帯 82/84 ~ 89/91 年比

州別	1982/84 平均		1989/91 平均	
	栽培面積(1,000ha)	播種率(%)	栽培面積(1,000ha)	播種率(%)
フランス	996.7	92.2	1,964.3	39.9
ドイツ	556.5	23.6	1,238.3	25.1
イタリア	587.5	24.9	1,297.4	26.3
その他	216.7	9.3	925.0	8.6
計	2,357.0	100.0	4,925.0	100.0

出所: JNG

表 40 大豆: TUVVの栽培地帯 (1990/91)

州別	作付面積 1,000ha	水灌面積 1,000ha	産量 1,000t	収率 t/ha
フランス	1,987.0	1,934.5	4643.8	2,400
ドイツ	1,313.0	1,264.4	2,799.0	2,214
イタリア	1,250.0	1,185.3	2,642.3	2,229
フランス	95.5	95.5	216.8	2,270
イタリア	83.0	83.0	190.9	2,300
フランス	72.5	72.5	145.0	2,000
ドイツ	59.8	51.0	81.8	1,604
フランス	50.0	50.0	76.5	1,530
イタリア	30.0	18.0	27.0	1,500
その他	31.1	28.3	50.4	1,781
計	4,966.9	4,782.5	10,873.5	2,274

出所: JNG - SA9P.

最近 播種改良の結果、大豆栽培のフランス、ドイツの南部を進行する傾向がある。この
 地帯は小麦と大豆の栽培の伝統的作物である。現在この大豆栽培面積が拡大している。

2024年同州の全国統計と比較して高めの値。

播種時期と収穫時期の地域による異なり、又前期栽培と中前期栽培による異なり。前期栽培は9月末に播種が行われ、中前期栽培は11月の中期に小豆の収穫直前に行われる。東北地方には12月の降雨の多さにより播種が行われず、収穫は前期の10月末から5月始めに開始され、中前期は6月に行われる。栽培面積は前期の80%程度である。

アメリカ産大豆の収量は最近3年間の平均(4)に比べて2.24トン/haで概同水準にある。アメリカ産大豆の1.70トン/haの値である。最近数年間の大豆の収量の増減は、播種地の高い前期栽培の面積の増加によるものと見られる。前期栽培の平均収量は2.5トン/ha、中前期の収量は1.8トン/haである。

表 4-1 播種地における大豆の収量比較

国名	89/90	90/91	91/92	平均
米国	2.17	2.29	2.30	2.25
アメリカ	2.17	2.40	2.20	2.24
ブラジル	1.78	1.63	1.85	1.76

出典: USDA

アメリカ産大豆栽培の拡大はアメリカの自然条件(基本的に中西部より中西部東部、ブリス、アメリカ北部にのみ栽培)が大豆栽培に適していること、小豆作の補完作物として小豆-大豆の組合せによる高い収益が得られることによる。

アメリカ産大豆の油粕原料としての需要、輸出量も大豆の増加に伴って増加している。播種地は、基本的にブリス、アメリカ西部及び南部に集中し、小規模なコロドバ、中西部、及びテキサス州にも栽培されている。栽培面積は、近年停滞している。90/91、栽培地は2.3百万ヘクタール、含有量は高収量の品種の導入により、70年代に栽培面積が拡大し、80年代には油粕原料全体の60%程度に拡大している。播種時期も、80年代の前半に大豆栽培の拡大を押し止めた2位の拡大時期である。

アメリカ産大豆の輸出は、アメリカ産大豆の栽培地の拡大による。

表 42

ヒマワリ : プルサンチン 生産推移

年度	作付面積 1,000ha	収穫面積 1,000ha	産量 1,000t	収水 kg/ha
1980/81	1,449.1	1,374.7	1,381.2	1,005
81/82	1,664.8	1,620.8	1,861.7	1,149
82/83	2,016.6	1,973.8	2,335.9	1,183
83/84	2,099.3	1,947.7	2,180.5	1,119
84/85	2,344.7	2,305.8	2,289.8	1,426
85/86	3,180.2	2,992.8	3,991.8	1,334
86/87	2,045.9	1,767.2	2,157.3	1,221
87/88	2,162.7	1,977.7	2,875.5	1,454
88/89	2,268.9	2,125.7	3,133.3	1,474
89/90	2,794.4	2,574.2	3,758.4	1,449
90/91	2,372.4	2,301.2	4,033.8	1,753

出所: JN9 - SASP.

表 43

ヒマワリ : プルサンチン 生産推移 (90/91)

作物別	作付面積 1,000ha	収穫面積 1,000ha	産量 1,000t	収水 kg/ha
プランス・アラス	1,326.5	1,311.0	2,350.9	1,793
コロンビア	300.1	284.4	568.4	1,998
サウス・フェ	293.1	278.6	451.8	1,622
ブーレン	250.5	247.9	414.8	1,677
チンゴ	101.6	83.6	115.4	1,380
エチオピア	60.4	59.4	92.4	1,556
その他	40.2	36.8	40.1	1,089
全国計	2,372.4	2,301.2	4,033.8	1,753

出所: JN9 - SASP.

プルサンチン 代表的油用原料作物として大豆及びヒマワリの仕向先は国内の工業加工原料としての消費が大半。前期農年度に種子として作付された割合は3%。残りの20%は海外市場に輸出された。其中、大豆の輸出割合は産量の25%、ヒマワリは7%である。

大豆及びヒマワリの栽培拡大は必然的に榨油工場への能力を増大させた。プルサンチンと大豆の油用原料、90%は大豆とヒマワリによる5%以下である。工業加工の結果として産出された油及び粕は、86-92年内平均産量は次の通りである。

表 44

油及び粕の生産量

作物別	生産量 1,000t	
	油産量	粕産量
大豆	1,180	5,170
ヒマワリ	1,290	1,320

表送された油は80%、粕は95%は輸出に向かっている。

国内榨油工場は設備能力は80年代前半90年代前半に始まるように増大した。1977年当時の年産3万トンの加工能力は80年代前半に7万トンの92年には15万トンの規模

諸国。大豆油は中東及びTOP、大豆粕はヨーロッパ及び旧ソ連国に主として輸出される。輸出入の増減は、大豆の需給に連動する。

表 47 大豆及び副産物：アムステルダム輸出実績 1000t

年度	大豆(豆)	大豆油	大豆粕
85	2,986.8	524.7	2,352.1
86	2,604.5	669.1	3,275.2
87	1,291.9	724.5	3,622.5
88	2,096.3	896.7	4,521.1
89	429.8	760.1	4,521.0
90	3,258.7	1,245.8	5,157.2
91	4,405.6	1,008.2	5,803.2

表 48 大豆(豆)：アムステルダム輸出実績

輸出先国	1987	1988	1989	1990	1991
フランス	-	1,043.9	233.1	1,270.6	1,721.5
イタリヤ	77.9	368.4	52.5	341.1	477.0
スペイン	-	-	-	296.1	496.9
ドイツ	891	133.0	55.8	347.7	355.5
ソ連国	237	194.9	-	127.6	298.7
ブラジル	-	-	-	-	251.3
その他	1,110.1	356.6	28.4	875.6	804.7
計	1,291.8	2,096.3	429.8	3,258.7	4,405.6

出所：JVA

表 49 大豆油：アムステルダム輸出実績

輸出先国	1988	1989	1990	1991
イタリヤ	97.0	188.0	355.0	194.7
中国	24.1	52.0	159.5	179.0
インドネシア	77.2	60.4	123.7	121.8
インド	-	20.0	-	71.4
ドイツ	-	11.4	25.2	49.9
ソ連国	76.9	31.8	86.4	99.7
その他	561.5	396.5	496.0	341.7
計	896.7	760.1	1,245.8	1,008.2

出所：JVA

表 50 大豆粕：アムステルダム輸出実績

輸出先国	1988	1989	1990	1991
フランス	963.2	1,242.7	1,473.6	1,852.5
スペイン	78.7	28.1	176.6	555.5
旧ソ連	1,868.9	1,633.7	703.2	484.9
ドイツ	212.8	147.8	299.3	420.6
イタリヤ	203.7	127.8	335.4	398.0
その他	1,193.8	1,340.9	2,109.5	2,091.7
計	4,521.1	4,521.0	5,157.2	5,803.2

出所：JVA

表 51

大豆及副産物の価格推移 : 大豆 (円)

年度	米 国 平均価格	ソソノ 林.ソソノ FOB	ソソノソソ ソソ.ソソノ FOB	ソソソソソ CIF
1980/81	272	287	277	310
81/82	219	243	231	253
82/83	224	242	228	260
83/84	275	284	275	301
84/85	209	215	209	223
85/86	187	196	195	211
86/87	180	192	193	209
87/88	245	274	262	282
88/89	261	261	264	292
89/90	212	218	209	247
90/91	209	214	207	241

表 52

大豆油

1980 81	501	494	492	545
81 82	418	493	434	463
82 83	455	494	422	463
83 84	673	685	682	722
84 85	650	609	598	625
85 86	397	342	347	377
86 87	339	302	310	324
87 88	499	400	399	443
88 89	465	411	412	435
89 90	491	420	424	438
90 91	463	418	415	454

表 53

大豆粕

1980/81	240	247	239	273
81/82	202	212	198	225
82/83	206	213	200	224
83/84	208	203	200	221
84/85	138	141	139	155
85/86	171	175	171	183
86/87	179	179	177	191
87/88	243	239	238	254
88/89	257	241	238	259
89/90	191	181	178	204
90/91	187	178	171	198

出所: SAGI.

2) ブラジル

ブラジルにおよぶ大豆卸内は60年代の中期に政府の採用による農業の近代化と積極的
な輸出政策の故に発展し今日では最大の輸出項目として外貨の獲得に貢献している。この

一政府の政策の故に大量の豆を工業卸内にも扱下し、70年代前半には大豆の
原料輸出の形態は加工品に多少の増加傾向、輸出への転換というが、今日では副産物(搾り
油)の大豆輸出の主力となっている。

原料大豆の生産は80年代を通じて100万ha前後の規模に達しており、年間20
百万tに近づく生産量に達している。このうち80/81年度には24百万tの記録を残している。平均収
率は1t/ha程度に低く、過去10年間で1ha当たり2tに達するまで9/92年1月
の収穫であった。

国内の大豆生産は南部地方を伝統的な産地とし、9/92年度には全国的に
約半分の生産が集中している。中でもパラナ州のバロバ地方は、1ha当たり1.2tから
5百万t以上と生産量も国内最大の産地であり、これは従来のセーラ地方に比べて
和中西部地方の生産に伸びており、9/92年度には全国的に40%近くを収穫している。

従来、大豆の生産は中南部地方を主産地として、中-南部地方を集中して生産する
政策であった。この品種改良の最盛期は、最近の10年間に北へ上り、国内の大豆生産
70年代後半、80年代前半は、パラナ州南部地方(バロバ地方)や
80年代後半、最北端の産地であるマツピラ州南部地方(バロバ地方)等の
例があり、更に最近には新しい産地として、PRONEX (セーラ地方)の
開発が計画されている。大豆の生産は記録を打ち出した。

表 54

大豆：ブラジルの生産推移

年度	収穫面積 1000ha	生産量 1000t	平均収率 1t/ha
1981/82	8,202.2	12,835.0	1.565
82/83	8,136.5	14,582.0	1.792
83/84	9,016.7	15,535.8	1.650
84/85	10,153.9	18,278.6	1.800
85/86	9,181.6	13,730.2	1.452
86/87	9,134.3	16,968.0	1.858
87/88	10,520.0	18,016.2	1.713
88/89	12,211.2	24,071.4	1.971
89/90	11,481.1	19,887.6	1.732
90/91	9,618.3	14,938.1	1.553
91/92	9,435.7	19,184.9	2.033

表 55

ソビエト大豆栽培統計 (1991/92)

地域及州別	作付面積 1000ha	収穫面積 1000ha	生産量 1000t	収水 18%
北部地区	3.0	6.9	11.2	1636
東北部				
ハ イ ヤ	329.0	329.0	489.0	1300
ツ = ヨ ヴ	21.2	21.2	24.0	1138
計	341.2	341.2	504.0	1478
中西部				
マシト・ゾロフ	1059.2	1453.7	2642.7	2506
ツ・ゾロフ・ト・ゾロフ	949.0	940.8	1871.2	1989
ゴ ヤ ス	825.3	822.9	1797.7	2185
エ ア ケ	42.0	42.0	92.8	2209
計	3275.5	3259.4	7404.4	2172
南東部				
イテ・ゾロフ	496.3	471.7	974.0	2065
ナ・ノ・ゾロ	465.6	465.6	853.8	1834
計	957.9	937.3	1827.8	2009
南部				
ホ・ゾロフ・ト・ゾロフ	2876.9	2876.6	5629.5	1957
ハ イ ヤ	1810.6	1819.6	3440.5	1900
エ ア ケ	205.3	203.7	367.3	1803
計	4892.8	4899.9	9437.3	1930
全国計	9474.4	9435.2	19184.9	2033

出所: 1992

国内工業加工施設能力は約35百万トンの搾取と20百万トンの前処理能力を有し、大豆の加工能力は、
 300万トンの大豆を処理する能力を有し、そのうち200万トンはdraw-back制度による原料大豆の輸
 入に依存している。

工業加工は、大豆を大豆油と大豆粕に分離し、大豆油の80%は国内市場に供給され、残りの20%は海外に輸
 出される。大豆粕は80%は飼料として利用され、残りの20%は国内の飼料加工業に供給され、消
 費されている。

輸出は、大豆粕と大豆油の20%は、大豆の加工能力と同様の規模（約8百万トン）で輸出
 される。大豆油の加工は、国内市場に供給され、大豆粕は、大豆の加工能力と同様の規模（約8百万トン）で輸出
 される。

輸出先は、大豆（豆）と大豆粕の加工能力最大の輸出先は、大豆の加工能力と同様の規模（約8百万トン）で輸出
 される。大豆油の加工は、国内市場に供給され、大豆粕は、大豆の加工能力と同様の規模（約8百万トン）で輸出
 される。大豆油の加工は、国内市場に供給され、大豆粕は、大豆の加工能力と同様の規模（約8百万トン）で輸出
 される。

表 56 ブラジルの大豆及び副産物輸出 (数量) 1000t

年度	大豆 (t)	大豆粕	大豆油
1981	1,450	8886	1,282
82	500	7,953	549
83	1,295	8,493	1,071
84	1,561	7,587	928
85	3,491	9,588	954
86	1,200	6,666	391
87	3,024	7,802	988
88	2,577	8,129	680
89	4,618	9,871	891
90	4,077	8,744	795
91	2,008	7,487	513
92	3,739	8,501	669

出所: CACEX, SESEX

表 57 ブラジルの大豆及び副産物輸出 (金額) 100万円

年度	大豆 (t)	大豆粕	大豆油	計
1981	409	2,163	651	3,112
82	123	1,668	379	2,170
83	309	1,793	461	2,563
84	459	1,460	651	2,569
85	363	1,175	602	2,140
86	243	1,198	138	1,579
87	570	1,450	304	2,324
88	728	1,892	294	2,914
89	1,138	1,950	395	3,483
90	910	1,610	321	2,841
91	445	1,369	208	2,022
92	812	1,595	265	2,672

出所: CACEX, SESEX

表 58 ブラジルの大豆及び副産物輸出先市場 (1992年)

大豆		大豆粕		大豆油	
輸出先国	100万円	輸出先国	100万円	輸出先国	100万円
オランダ	294.1	オランダ	484.2	イタリヤ	25.2
スペイン	129.7	フランス	264.2	バングラデシュ	46.1
日本	95.4	イギリス	180.0	パキスタン	42.9
ベルギー	64.0	スペイン	141.9	中国	42.5
ドイツ	52.9	ハンガリー	90.4	ドミニカ	15.1
インド	50.7	ドイツ	69.5	オランダ	12.3
英国	38.3	ベルギー	55.3	インド	19.4
その他	76.3	その他	309.9	その他	11.4
計	812.9	計	1,595.9	計	264.9

出所: CACEX, SESEX

3) パラチア

パラチアの大豆栽培は 1960年代に日本移民者によって導入され、水害に新しい分野であるが、パラチアの降持の東部地方の自然条件が栽培に適し、海外からの需要が高まったことにより急速に拡大し、80年代の中期に 100万トンの栽培規模に上ったが 90年代に入ると 200万トンに達した拡大ペースは、パラチアの南部よりも遅く、パラチアの 10%程度のところである。また大豆栽培の一部分を形成している。24万トンのパラチア 1万トンのパラチアと比較すると小規模の栽培である。パラチアの降持は主として輸出の作物としており、需要は外貨獲得である。

国内の生産は、日本移民者のパラチア栽培による降持の降持は主として大豆栽培であり、そのうち国内生産の 85%が占められている。土地生産性は高く 92/93 年からは 1.17-1.18 トンの反収を得たが、パラチアの降持は、栽培上の問題点として、生産単位が小さい栽培形態の改良、余剰の多量に減少することや、土壌の保全に努める必要がある。また、栽培化の遅延が下りたことにより、土壌の侵食の危険が大きい。また、距離の問題として、内陸部の大豆栽培地（パラチアの降持地）との距離が通る輸送コストが非常に高い。これらの不利な面を克服するために、大豆栽培の品質改善、蛋白、油脂の含有率も他国の産品と比較して高いもの、国際市場における高価格の取引がその利点とされている。

表 59 大豆：パラチアの栽培状況 (92/93)

果別	栽培面積 1000ha	生産量 1000t	反収 kg/ha
(東部地方)			
イタチ	255.7	777.9	3042
アイト	252.7	742.6	2938
カンパニ	59.0	125.5	2326
カアグアス	23.9	51.6	2159
アマンバ	17.1	37.6	2199
サニ、アード	21.0	36.4	1735
カアサバ	9.5	19.7	2079
パラチア	9.4	9.9	2250
アイト	9.1	9.5	1860
コンパニ	0.2	0.4	1905
その他	0.2	0.4	-
(西部地方)	0.0	0.0	-
全国計	635.0	1793.5	2825

出所: M. A. S.

表 60 1977年国大豆推移

年度	面積 1,000 ha	総量 1,000 t	収率 kg/ha
1985/86	539.0	662.3	1.229
86/87	674.0	1,178.6	1.749
87/88	766.0	1,407.9	1.837
88/89	851.0	1,614.6	1.897
89/90	900.0	1,794.6	1.994
90/91	552.6	1,032.7	1.869
91/92	594.8	1,192.1	2.004
92/93	635.0	1,793.5	2.825

出所: ESTIMACION DE LA PRODUCCION AGROPECUARIA

国内大豆の採油工場は、棉と大豆の搾油料としての採油加工が行われていた。工場数は比較的少ないが、大豆の集中度は高く、全体の90%を最大の工場1社(MARANGATU)が国内大豆の取引の70%を占有了。工場半数は搾油工程で付いた最終商品と、製造工程で付いた代用粗油とを販売している。年間製造能力は約410千ト、原料は大豆51%、棉32%その他17%に分割されている。大豆の採油供給量は73%は国内市場、11%は輸出、16%は輸出に付随している。

表 61 1977年国大豆採油推移

年度	重量 1,000 t	金額 100万円	平均単価 us/b
1985	709.5	100.5	142
86	603.8	93.9	69
87	1,095.1	122.8	112
88	1,256.1	153.8	122
89	1,862.8	383.0	205
90	1,640.8	267.4	163
91	1,029.2	157.1	153
92	857.5	137.2	160

出所: BOLETIN ESTADISTICA N: 404

表 62 1977年国大豆粕推移

年度	重量 1000t	金額 100万円	平均単価 us/b
1985	4.6	1.5	328
86	3.9	2.7	197
87	7.8	1.7	223
88	22.0	3.8	172
89	17.9	5.7	318
90	9.0	2.5	276
91	29.0	10.0	347
92	79.8	32.0	401

出所: BOLETIN ESTADISTICA N: 404

その他 XIV2-V 肉休子-7-

表 63 大豆：ソルジャー豆産地

年度	栽培面積 1,000ha	生産量 1,000t	収収 kg/ha
1983	9.2	11.9	1,298
1984	9.2	10.9	1,187
1985	14.8	21.5	1,449
1986	20.0	25.4	1,270
1987	36.5	62.8	1,720
1988	42.3	72.0	1,700
1989	55.0	38.5	700
1990	28.5	37.0	1,300
1991	15.0	18.0	1,200
1992	9.2	15.5	1,685

出所：BOLETIN ESTADISTICA N° 157

表 64 大豆：ソルジャー豆産地

年度	栽培面積 1,000ha	生産量 1,000t	収収 kg/ha
1983	43.8	18.8	429
1984	71.3	25.9	363
1985	54.8	50.9	564
1986	77.4	72.2	933
1987	67.1	48.0	715
1988	47.0	32.7	696
1989	66.1	48.9	730
1990	58.7	28.7	489
1991	62.5	61.6	986
1992	77.2	85.1	1,102

出所：BOLETIN ESTADISTICO N° 157

表 65 XIV2-V 大豆生産

国別	生産量 1,000t			増減 (%)	
	a) 85/90平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
ブラジル	18,526	14,938	19,161	-1 24	22
アルゼンチン	8,466	11,530	11,315	27	-1 2
パラグアイ	1,235	1,033	1,315	-1 20	21
ウルグアイ	71	30	33	-1 135	9
XIV2-V計 A	28,297	27,531	31,824	-1 3	13
世界生産量 B	101,621	103,611	112,960	2	8
%	27.8	26.6	28.2	-	-

出所：SID.

表 66

XU2-109 大豆油產

區別	生產量 1,000t			增減 (%)	
	a) 85/90 平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
ブ>VIV	2,646.2	2,505.0	2,779.0	(-) 5.2	5.0
PIVIVIV	893.0	1,261.0	1,394.0	41.2	56.1
IV>VII	25.2	29.0	31.0	16.0	6.9
VIV>VII	33	1.0	1.0	(-) 203.0	-
XU2-10 計 (A)	3,567.7	3,796.0	4,205.0	6.4	10.8
合計 (B)	15,314.8	15,731.0	16,783.0	2.7	6.7
A/B	23.3	24.1	25.1	-	-

出所: B/D ATU/SF

表 67

XU2-109 大豆油消費

區別	消費量 1,000t			増減 (%)	
	a) 85/90 平均	b) 1991	c) 1992	%	1/c
ブ>VIV	2,015.0	1,855.0	2,149.0	(-) 8.0	15.8
PIVIVIV	(18.4)	161.0	204.0	111.0	26.7
IV>VII	8.6	1.0	1.0	(-) 96.0	-
VIV>VII	2.2	0.0	0.0	-	-
計	2,007.4	2,017.0	2,354.0	0.5	19.7

出所: B/D ATU/SF

表 68

XU2-109 大豆運出

區別	輸出量 1,000t			増減 (%)	
	a) 85/90 平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
ブ>VIV	2,653	3,800	4,000	30	5
PIVIVIV	1,867	3,200	3,000	42	- 7
IV>VII	1,069	700	1,100	- 53	36
VIV>VII	52	27	30	- 93	10
XU2-10 計 (A)	5,631	7,727	8,130	27	5
合計 (B)	26,943	26,050	29,850	- 3	13
A/B (%)	20.9	29.7	27.2	-	-

表 69

XU2-109 大豆油輸出

區別	輸出量 1,000t			増減 (%)	
	a) 85/90 平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
PIVIVIV	966.8	1,100.0	1,190.0	12	8
ブ>VIV	711.4	675.0	675.0	- 5	-
IV>VII	17.8	28.0	30.0	36	7
VIV>VII	1.4	1.0	1.0	- 40	0
XU2-10 計 (A)	1,697.4	1,804.0	1,896.0	6	5
合計 (B)	3,882.8	3,592.0	3,852.0	- 8	7
A/B	93.7	59.2	99.2	-	-

表 20.

XIV2-IVの大臣指輸出

国別	輸 出 量 1000t			増 減 (%)	
	a) 85/90平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
ブツVIV	7962	8,500	8,250	6	- 3
PIVIVIV	4,661	5,900	5,800	21	- 2
103771	103	160	145	36	- 10
7IV771	12	10	9	- 16	- 11
XIV2-IV計 (A)	12,318	14,570	14,204	15	- 3
世界計 (B)	26,183	26,770	26,950	2	1
A/B	980	59.9	54.7	-	-

表 21

XIV2-IVのヒマツリ生産

国別	生産量 <1000t			増 減 (%)	
	a. 85/90平均	b. 1991	c) 1992	a/b	b/c
PIVIVIV	3,288	3,800	3,600	13	- 6
ブツVIV	31	45	47	31	4
103771	19	22	21	11	5
7IV771	44	32	33	- 26	3
XIV2-IV計 A	3382	3898	3702	13	- 5
世界生産量 B	20,507	22,560	22,590	9	0
A/B (%)	16.5	17.3	16.4	-	-

出所: BIA.

表 22

XIV2-IVのヒマツリ消費

国別	国内消費量 (1000t)			増 減 (%)	
	a. 85/90平均	b. 1991	c) 1992	a/b	b/c
PIVIVIV	3,227	3,500	3,350	8	- 4
ブツVIV	33	45	47	27	4
103771	19	21	22	8	5
7IV771	44	32	33	- 26	3
計	3323	3598	3452	8	2

出所: BIA

3 工業原料作物

3.1 綿

3.1.1 國際市場動向

棉花價格 (USDA) によれば 1993 年には世界の綿生産量は 18 億トンと推定され、前年と比較して 1.1% の下廻りとなった。これは世界の消費量の前年比 1.5% 増加の 18.7 億トンに近しい。この結果、世界の在庫は減少したと見られ、高い在庫水準が価格に反映した。

2、政府の関与が減少し、消費量の増加は在庫の割合が高くなり、貿易の自由化が進んでいる。世界の在庫量は 89/90 年の 5.7 億トンから増加し、91/92 年には 8.9 億トンに達し、消費量の約 48% に高水準に達している。93 年には世界の棉花生産量は 19.0 億トンに達し、前年比 4.1% の増加を示している。93 年には世界の棉花生産量は、中国、インド、及びパキスタンに集中している。中国、インド、及びパキスタンの棉花生産量は、世界の棉花生産量の約 80% を占めている。中国、インド、及びパキスタンの棉花生産量は、世界の棉花生産量の約 80% を占めている。

92 年の平均価格は 1 トン当たり 57.94 センツと 90 年に近い 80.75% の下落を遂げ、最近政府の関与が減少している。93 年には世界の棉花生産量は、中国、インド、及びパキスタンの棉花生産量の約 80% を占めている。中国、インド、及びパキスタンの棉花生産量は、世界の棉花生産量の約 80% を占めている。

表 33 世界の棉花生産と消費状況

単位	1990/91	91/92	92/93	1003/94
期首在庫	5.7	6.2	8.9	8.2
生産量	18.9	20.9	18.0	18.6
輸入量	6.7	6.4	5.6	5.8
供給量計	24.7	27.1	26.9	26.8
輸出量	6.5	6.2	5.5	5.9
需要計	18.6	18.4	18.7	19.0
期末在庫	6.2	8.9	8.2	7.8

単位: USDA

3. 1. 2 XILCO 2-10 の生産と市場

1) TULUVIN

TULUVIN は XILCO 2-10 の中下段 1937 年 (12 次) の生産国で、25 万トン以上の栽培面積を有している。栽培地帯は、チリ、アルゼンチン、ペルー、フランス、イタリア、スペイン、及び 211 国に亘る各地に分布している。1/2 平均の栽培面積は 22.777-10 である。

TULUVIN の栽培地帯は世界の生産と比較して、11.5% の面積を占める。栽培地帯の北西、北東部では乾燥気候が大半を占め、適当な作物である。面積は 100 の栽培地帯から、240 万トンの繊維、45 万トンの種子、繊維生産から得られる繊維の年間消費量は 147 万トン、輸出量は 1143 万トン、中下段の年間 10 万トンの輸入が行われている。

過去 10 年間の統計によれば、世界の生産、繊維の消費量、輸出量は増加傾向にあり、20 年間の生産量は大幅に変化。1987 年の 100 万トン、91 年には 300 万トンに伸びた。年間の生産量は 400 万トンに到達した。そのうち国内消費、輸出量は同様に増加した。国内の栽培地帯は、チリ、アルゼンチン、ペルー、フランス、イタリア、及び 211 国に亘る各地に分布している。

表 74 TULUVIN の栽培地帯の統計

年度	栽培面積 (1000ha)	生産量 (1000t)	収水 (kg/m)	種子生産量 (1000t)	繊維生産量 (1000t)
1981/82	403.8	491.0	1229	269.9	152.6
82/83	373.3	373.3	1087	201.6	111.4
83/84	485.5	610.0	1299	325.6	179.6
84/85	462.7	536.1	1199	292.6	171.4
85/86	353.3	376.6	1112	207.0	120.0
86/87	291.8	322.8	1181	174.3	100.0
87/88	499.9	849.4	1726	467.0	281.8
88/89	524.0	619.3	1234	×	×
89/90	533.7	789.0	1493	418.1	254.0
90/91	634.2	781.8	1460	×	×

出所: BOLSA DE CEREALES ...

表 75 TULUVIN の栽培地帯の統計 (1990/91)

項目	栽培面積 (1000ha)	生産量 (1000t)	収水 (kg/m)
チリ	456.0	568.9	1350
アルゼンチン	77.0	86.4	1200
ペルー	59.0	48.8	1080
フランス、イタリア、スペイン	32.5	51.0	1570
その他	181.7	26.7	1427
計	634.2	781.8	1460

出所: BOLSA DE CEREALES

表 76

72.1.1.1 第43 第0 生産統計 (単位)

年度	収量(担) 1000ha	生産量 1000t	収水 kg/ha
1981/82	1,571.1	1,691.6	1,077
82/83	1,348.0	1,525.6	1,132
83/84	1,674.1	1,892.4	1,130
84/85	2,252.9	2,667.9	1,184
85/86	1,995.9	2,198.0	1,101
86/87	1,277.3	1,613.1	1,263
87/88	1,824.6	2,437.8	1,336
88/89	1,506.8	1,813.9	1,203
89/90	1,383.5	1,774.5	1,283
90/91	1,484.1	2,037.8	1,373
91/92	1,591.6	1,848.3	1,161

合計

(不綿)

年度	収量(担) 1000ha	生産量 1000t	収水 kg/ha
1981/82	2,072.7	233.3	112
82/83	1,580.6	78.2	49
83/84	1,430.0	267.7	187
84/85	1,337.3	188.6	141
85/86	1,163.9	116.1	98
86/87	691.1	60.3	87
87/88	734.4	99.3	135
88/89	618.6	47.1	76
89/90	511.8	38.2	75
90/91	345.0	38.5	112
91/92	284.2	26.3	79

合計 1986

表 98

72.1.1.1 第43 第0 生産統計 (1992年)

区別	面積 1000ha	生産量 1000t	収水 kg/ha
草綿			
バ T	704.5	972.8	1,381
サ T	230.0	397.6	1,729
ハ T	175.7	103.9	591
サ T	73.3	85.1	1,161
サ T	53.8	83.7	1,557
サ T	111.3	78.4	704
サ T	245.6	141.4	-
計	1,594.2	1,862.9	1,169
不綿			
サ T	137.2	13.8	100
サ T	59.3	4.9	74
サ T	24.1	1.6	68
サ T	53.5	1.5	29
サ T	9.6	1.0	104
サ T	-	-	-
計	283.7	22.3	79
合計	1,877.9	1,885.2	1,004

綿部門の正面方向成長を以て低価格相場と音虫ビブの売出し、2社が平均25%上昇したことがあり、

綿部門は元の工業部2万0千円の手頃な水準を以て特徴としていたが、7月以降は工業部門の比重が大幅に増え、綿織物と原料と3年間の製品を製造販売した。

原料の増産は新技術開発ととも、国際価格の暴落も大きい。最近価格保証制度の設けられたり、インフレ率を抑えて毎月調整された価格と82年AGF（AGF）又は双足融通（EGF）が行われた。

在庫率は高い水準で行われていたが、赤字問題の深刻化、完全な赤字の行方と加増率の状況もあり、このままでは赤字の解消が難しくなる。状況は徐々に生産管理の改善と換算額が小さいながらも管理が行われていた。増産もつたが大きな問題としていた音虫ビブは、1983年以降没落した。状況は大きく影響を受けた。元の赤字は徐々に解消されたが、赤字の解消は2000年までにはなっていない。

7月の織物工業は全額で3900社が存在し、生産高は製造業16部門の中で10位に位置している。直接雇用人員は1,150万人、綿部門全体の売上は直接、間接部門を合わせた10万人が競争力と生産性を推定した。年間の原料消費量は700千トン、年間120万トンに輸出された。7月の織物工業は同様に工業生産中心の紡績、織物及び化学繊維製造部門である。紡績工業は原料の60%を棉、34%を絹、2%を化学繊維に消費している。

織物工業は1,160の織物工業の中で最も大きな割合を占める。年間の織物生産量は2,200万トンである。織物工業の原料は棉が最も多く、2%を絹、1%を化学繊維に消費している。2000年2月90%を占めている。そのうち、綿織物の比率は48-49%を占めることがあり、一時は合成繊維の比率は、その比率は低く、2%を化学繊維の需要は再び増加した。その結果、その比率は徐々に減少した。

現在この国の工業は競争力をもつており、9月8日此件実施の上は輸出の増加に伴って、対内商品と輸出の競争力は逆の中、F3は47%、F1は150万人の人を指し、国内の生産は2倍の増加した。その結果、その比率は徐々に減少した。

×100 2-10 市場における 73 v.10 金融工業界は 技術設備、技術面、農産物の多様化面での
 下の 2-10 市場の 100 の 全般に 技術設備の近代化に力を入れ、近代的な 田舎の 課題
 に取り組む。

1) 1977年1.

棉は 1977年の 農産物の中 70% と 50% (従来の 1/2) 代表的作物の 1つである。植
 民地時代の 独立時期から、1977年の 農民は 27% の 70% 重要な 糧食作物である。こ
 の 政府の 2つに 重要視し、綿作の 政策部門の 優先項目として 各種の 措置を 講じて 20% の 政
 策は 今日の 方針 優先と している。

国内市場は 限定的に 輸出の 輸入 農産物として 大豆と 豆油 最大の 項目に なる。1985年の
 輸出 総額の 27% を 占める。現在 112万 20-30% の 高い 比率を 保っている。

1991年の 統計によれば 綿の 栽培に 従事する 栽培者 数は 190千人。農産物 内部 50%
 と なる。国内 栽培者 は 東部地区、全州、西部地区の一部に 集中している。ほとんどの 栽培者
 は 2005 年 中の カンボジア、チベット、ブータン、175万 果樹の 栽培面積 栽培地 大い。同じ 栽培
 者の 7-1-28% 92/93 栽培者 4000 栽培地 及び 近頃の 栽培面積 増加 している。

表 79 1977年(国内)における 綿の 栽培状況 (92/93 栽培)

果 別	栽培面積 1000ha	生産 1000t	収水 kg/ha
カブツアズ-	17.9	112.1	2.367
チンパト	29.8	62.3	2.088
アムト	18.5	39.7	1.981
イフア	19.6	34.5	1.858
アア	19.5	35.9	1.843
カア	18.9	35.5	1.786
コン	22.1	33.6	1.521
カン	17.6	25.7	1.462
その他			
東部地区計	227.6	409.0	1.797
西部地区計	7.9	11.8	1.489
全国計	235.5	420.8	1.787

出所: 農産物. DINTAGE STATISTICA

過去 8年 内の 栽培面積の 平均 408 千 ha. 栽培地 481.8 千 ha の 規模である。大豆/棉の
 棉の 代用 作物の 31% 20% 国内 海外 収入に 支える ための 重要な 作物として 今後 栽培 面積 増加
 傾向 にある。

表 80 パラチンに於ける綿の生産推移

年度	収獲面積 1000ha	生産量 1000t	収収 kg/ha
1981/82			
82/83			
83/84	299	320	1088
84/85	385	469	1218
85/86	385	393	891
86/87	284	248	873
87/88	403	543	1347
88/89	438	630	1438
89/90	509	642	1263
90/91	415	632	1522
91/92	437	391	895

出典: ESTIMACION DE LA PRODUCCION AGROPECUARIA

綿作の大部分は小農業者によって行われ、その小農に必要な錠剤の供給は主に仲買商人によって行われ、錠剤は小農に仲買商人によって買上けられ、

精製工場は国内 47 所あり、その中大工場の生産が 95% を取扱う集中地である。又国内の織造工場は消費需要の 5% を生産量の 5% を越えており、95% は海外市場に輸出される。

綿作の価格に政府と工場の協定が毎年決定される。価格設定は、毎年同一価格を維持し、工場、錠剤、錠剤等が考慮され、生産者価格に付帯する要素として次の事項があげられる:

- a) 1 農家の生産規模が小さいと生産者から工場への取引条件が不利。
- b) 仲買人による融資が、高利生産者の負担に転じる。
- c) 工場設備の老朽化による高利工業工場が、錠剤価格に付帯する。
- d) 租税
- e) 市場に肉付情報不足。

錠剤は綿の大部分は上半期の末から下半期の始めにかけて輸出される。この時期は北半球の錠剤期に当り、南北半球の季節差がパラチン綿作に有利な条件を生じさせる。

収獲は基本的に連続的に行われ、その面積が大きい場合、市場価格の変動の場合に不利。このため、収獲は一般的に収穫時期の開始が不足する中で、中飛請取は高く、このため、水産物は、深部工場に販売される。生産者は、このため、平均して 12 人の仲買商人に買上けられ、その生産者に対して、行っている取引は、主に 10 人である。この仲買商人の数は、12% の生産者の利益を減少させる。このため、問題も起る。① 貯蔵

a) 不備に及ぶ品質の低下。 b) 高い雇員コスト。 協任分理の欠陥、計量の悪化、互いに及ぶ生産者受取価格の減少

この問題を、2011年以降の綿織物の輸送コストが上昇した不利な要素がある。 国内に工場を移す、気象条件を良くして生産に制約を要する、利用出来る工場が少なくなっている。 今後、生産拡大の和とインフレを抑制する必要がある。

綿織物と原料として使用される繊維は、最近伸びている。 中でも首都マヌサラ市周辺に集中する。 繊維工業部門の設備能力は総額 19,640 万、織物 355 万 m²、在同人数は 179,000 人で 79% が工業大臣管内にある。 最近工業を除き全般に機械の老朽化にあり、他の工業部門と比較して知事は低いとされている。

設備の老朽化、技術者の不足、原料コストの上昇、羊毛部門の直面する問題等により非合法的に輸入された中国産品と競争出来ず状況に陥っている。 原料の供給は直接輸出と同時期に在庫がある。 交通の悪化と価格の割にマヌサラは低いと、この部門への投資は減少している理由とされている。 機械の老朽化と低価格の長期価格競争に不利な状況に陥っている理由とされている。 この問題を克服しようとしている。

マヌサラの繊維部門の付加価値は低く、綿織物の品質が高くない、原料コストの低くないと競争力のあると見られる。

綿織物の輸出は増加傾向にある。 同様にマヌサラ、ポルトガル、スペイン、イラン、マヌサラを主要輸出国としていた。 この国に有利な輸出交換、過去10年間の輸出推移は次の通りである。

表 81 マヌサラの綿織物輸出推移

年次	数量 1000 t	金額 100万\$	平均単価 US\$/t
1983	79.0	85.1	1077
84	89.9	131.2	1467
85	158.8	101.8	893
86	119.6	89.7	765
87	91.0	100.9	1109
88	170.3	209.6	1231
89	221.5	309.9	1385
90	231.7	332.9	1437
91	217.0	318.8	1470
92	185.1	209.4	1131

出所: BOLETIN ESTADISTICO N.º 407

1977年 纤维输出统计

年度	Raw	Spun	Wool	1911-	7722	合計	計
1985	4.0	13.1	5.2	2.4	21.8	112.3	153.8
86	21.9	2.0	5.3	1.0	-	80.4	110.6
87	19.4	3.4	9.0	3.9	-	55.8	91.0
88	2.6	12.4	21.5	4.8	1.8	146.2	170.3
89	11.9	10.5	4.2	5.9	0.6	188.4	221.5
90	18.5	22.6	4.2	8.6	0.5	178.3	231.7
91	5.2	9.1	3.3	16.5	0.2	182.7	217.0
92	7.8	6.9	6.5	3.0	2.3	158.6	185.1

100万

1985	3.1	11.8	4.6	21.0	20.6	99.7	141.8
86	18.1	1.3	4.2	0.6	-	56.5	80.7
87	26.6	3.4	8.3	3.5	-	59.1	100.9
88	3.1	14.8	2.1	5.7	2.1	181.8	209.6
89	18.1	12.8	4.1	7.3	0.9	263.7	306.9
90	27.7	31.2	3.5	12.2	1.0	257.3	332.9
91	6.9	12.8	4.2	24.3	0.6	270.1	318.9
92	19.3	6.7	6.3	4.1	2.8	179.2	209.4

出所: BOLETIN ESTADISTICO N° 407

⇒ シルク

シルクの生産は、戦後、1950年代後半に150%程度増加した。生産は国内東部の海軍に集中した。生産量は、1952年以降、概ね増加傾向にある。

原料は、国内産と輸入とがある。国内産は、同様に増加傾向にある。輸入は、主に中国産である。国内消費は、繊維工業の発展に伴って増加している。

1970年代後半に、原料の供給が不足したため、国内産の割合が増加した。1990年代後半には、原料の供給が安定した。

表 83

XIV2-IV9 纤维产量

国 别	产 量			增 减 (%)	
	a) 1985/90 平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
ブ>VW	159.6	264.1	132.9	(-1) 8	19
PIWVTV	190.3	300.0	240.0	37	(-1) 26
ブ>VW	159.6	264.1	132.9	40	(-1) 99
ブ>VW	92	*	A1	(-1) 65	*
XIV2-IV 計 (A)	1,121.8	1,281.2	1,203.9	12	(-1) 6
世界生産量 (B)	1,944.7	*	*	*	*

表 84

XIV2-IV9 纤维输出量

国 别	输 出 量			增 减 (%)	
	a) 1985/90 平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
ブ>VW	164.0	219.0	185.1	24	(-1) 17
ブ>VW	99.3	167.0	109.0	41	(-1) 53
PIWVTV	166.7	141.0	143.0	51	1
ブ>VW	0	0	0	-	-
XIV2-IV 計 (A)	332.0	525.0	437.1	37	(-1) 20
世界輸出量 (B)	5,265.7	*	*	-	-
A/B	63	*	*	-	-

* 予-9-乳

表 85

XIV2-IV9 纤维输入量

国 别	输 入 量			增 减 (%)	
	a) 1985/90 平均	b) 1991	c) 1992	a/b	b/c
ブ>VW	61.8	101.0	105.0	39	9
PIWVTV	15.5	60	10.0	(-1) 158	40
ブ>VW	7.9	9.2	8.1	14	(-1) 14
ブ>VW	9.2	2.7	2.3	72	(-1) 20
XIV2-IV 計 (A)	85.9	118.9	125.3	28	5
世界輸入量 (B)	5,313.3	*	*	*	*
A/B	1.6	*	*	*	*

4. 嗜好作物

4.1 コーヒー

4.1.1 国際市場動向

世界のコーヒー生産量は約100万トン(60kg)で、ブラジルが羊頭(28万トン)、コロンビア(19.5万トン)、インドネシア(7万トン)、メキシコ(4.5万トン)、象牙海岸(4.5万トン)等と主要生産国となっている。大陸別に見ると世界1,2位の生産国である南米大陸が世界の生産量の40%を占める大国で、ブラジルの19%を占める第二位である。メキシコ、インドネシア、エチオピア等は中米の主要生産国である。

世界の輸出量は92/93年度は約28.3万トンで、世界の生産量の約80%を占めている。主要の輸出商品は、南米諸国、インドネシア、象牙海岸、メキシコ、エチオピア等の嗜好作物である。南米諸国は供給例、工業先進国の消費例に合致している。エチオピアの輸出量はブラジルの逆さ5年間の推移である。世界貿易は22%~28%を占め、1990年20万トン前後の輸出であった。コロンビアの輸出量は10%前後で、1990年17.3万トンに達し、コロンビアの輸出量は16.7万トンに増加した。メキシコは輸出量は1.7万トンに達し、エチオピア、象牙海岸、インドネシアの輸出量は約5%、5%前後の輸出量である。

南米諸国の輸出量は高級コーヒーの生産国であるブラジルの輸出に大きく、全体の12%前後を占める。25%前後の輸出量は、コロンビアの輸出量の増加に上乗せである(9/91)である。インドネシア、エチオピア等はメキシコ等の中米諸国の生産国である。

ブラジル等の場合は、インドネシアの輸出量が減少している。ブラジルの輸出量は、インドネシアの輸出量の約2倍に達している。コロンビアではブラジルの生産量は増加している。同様で、インドネシア等の中米諸国も100%の生産国である。逆に象牙海岸、インドネシア、エチオピア等は、全体の輸出量は減少している。

世界のコーヒー市場は生産国と消費国の間の国産コーヒー市場である。生産国の輸出削減は、インドネシア等の供給をコントロールする手段と見られる。最大の輸出国であるブラジル、最大の消費国であるインドネシアは、1998年7月に供給コントロールの中止を決定した。以後、世界のコーヒー市場は供給削減の時期に入ると見られる。

表 80

コビー：世界の輸出と交換

国 別	100%換				
	1988/89	89/90	90/91	91/92	92/93
ブラジル	17.4	18.2	17.5	22.2	17.3
ロシア	9.4	11.8	13.5	12.9	16.7
インドネシア	5.3	6.2	6.8	5.8	4.9
グアテマラ	2.4	3.6	2.9	2.9	3.5
東ドイツ	3.5	2.4	4.9	3.8	5.0
エリトリア	2.0	1.5	2.3	2.2	2.2
スロバキア	2.7	5.1	3.5	3.4	3.0
コスタリカ	2.1	2.3	2.2	2.4	2.4
プエルトリコ	2.7	2.7	2.2	2.2	1.8
その他	19.4	24.4	23.0	19.6	21.5
計	66.9	78.2	78.3	72.4	78.3

出所：OIC

4.1.2 XLCOS-100の生産と輸出

XLCOS-100の中核コビーの需要は輸出市場に大きく依存している。1992年1月以降の生産は、見込み通りである。また、輸出市場の状況は、概ね安定している。

ブラジルのコビー生産量は、80年未だに行われた取引の結果、約43億本に推定される。これは、世界的な需要の減少により、17億本に落ち込んだ。特に、1990年以降は、新たなコビー市場を確保するために、コスト削減や生産効率の向上を図り、今世紀の中期に生産能力の拡大を図る。また、生産コストの低下により、生産規模が拡大され、今年度の5.2億本の生産量は、概ね安定している。1992年1月の輸出量は、約10億本に増加した。これは、中央部地域の需要増加によるものである。一方、コビーは1000本に達するまでに、約40億本の生産規模を必要とする。

表 81

ブラジルのコビー生産

1000本

州 別	1991	1992	1993
ミナス・ジェリス	1,192.4	1,106.5	1,155.3
エスピリト・サント	551.0	513.2	448.0
サン・パウル	475.2	472.8	440.1
パラナ	403.8	206.8	204.0
その他	428.2	383.8	326.4
全国計	3,050.6	2,587.1	2,573.8

出所：IBGE

表 88

ブラジルコーヒー生産推移

年度	面積 1000ha	生産量 1000t	平均収量 kg/ha
1985	2,533.8	3,821.3	1,508
86	2,591.5	2,082.8	803
87	2,876.6	4,405.4	1,531
88	2,975.2	2,737.7	920
89	3,026.5	3,059.7	1,011
90	2,905.8	2,926.2	1,007
91	2,767.4	3,050.6	1,102
92	2,498.5	2,587.1	1,035
93	2,300.4	2,573.8	1,119

出所: 1996

表 89

ブラジルコーヒー輸出実績(コーヒー豆)

年度	数量 1000t	金額 100万ドル	平均単価 us\$/t
1987	988	1,959	1,983
88	514	1,170	2,276
89	653	1,610	2,465
90	853	1,106	1,357
91	1,095	1,382	1,262
92	1,018	970	953
93	964	1,065	1,105

(1987年以降)

1987	26	210	5,833
88	23	124	5,367
89	30	193	6,433
90	51	147	2,878
91	32	97	3,031
92	51	142	2,772
93	64	217	3,377

出所: CACEX, SECEX

表 90

ブラジルコーヒー輸出先別 (1993年)

輸出先国	数量 1000t	金額 100万ドル	平均単価 us\$/t
米 国	206.2	199.3	966
イ タ リ ヤ	114.7	139.0	1,211
ド イ ツ	98.6	117.5	1,190
フ ラ ン ス	80.4	98.2	1,221
ア ー ジェ ン	43.0	46.6	1,085
ス ー ィ ッ ド	37.4	41.6	1,112
ポ ー ル ー ザ	35.4	41.1	1,162
チ レ	32.1	37.3	1,164
其 他	316.1	344.3	-
計	963.9	1,064.9	1,105

出所: SECEX

5 果実類

5.1 リンゴ及び梨

5.1.1 国際市場動向

世界の供給状況：リンゴ及び梨の世界生産は90年以降減少傾向にあり、93年のECにおよび大増産傾向にあり、東ヨーロッパの減産と相殺されつつある。世界のリンゴ生産の約16%は南半球において生産されるが輸出品は33%を占め、梨の場合も世界の生産の15%、世界の輸出品の5%は南半球産である。世界の消費量の95%は北半球に集中する。世界の年間貿易量は約2,500千トンである。

世界の生産国としては中国、ドイツ、イタリ、フランス、トルコ、日本、スペイン及びハンガリーが大きい。南半球では、アルゼンチンが最大の生産国で、チリ、南アフリカ連邦、ニュージーランドが主要生産国である。このうちチリは最近急速に生産を増大しており、アルゼンチンに次ぐ生産国に成長している。これらに次いで新しい生産国としてブラジル及びオーストラリアがある。

世界の輸出国としてはフランスがもっとも大きく、中国及びチリがこれに次いでいる。チリの輸出品は生産量の50%に達しているがアルゼンチンに次いでいる。これらに続きオーストラリアの輸出も大きく、ロンドン港はEC市場への中継港の役割を果たしている。最近の政治情勢の悪化により輸出も落ちているが、ハンガリーも主要な輸出国に数えられる。

世界の輸入国はドイツの輸入が大きく、世界の輸入の約3割を占める。これに次いで日本は大型の輸出国であると同時に大型の輸入国でもあり、南アフリカのEC市場に供給する。EC圏は世界の需要の約8%を占める最大のリンゴ市場である。

北半球の収穫期と供給は南半球と逆行する。中でも最大の市場であるECの収穫期に重なる供給国としての役割を果たしている。EC市場への南半球産の輸出国はチリに次いで輸出品を増大している。従って地位を占めつつある南アフリカ連邦、ニュージーランド、アルゼンチンもこれに加入している。

北半球の収穫期に供給する南半球の生産量は冬期に集中する。各供給国の政治情勢の悪化により果物の南アフリカやニュージーランドでの公共市場への参入も、半産国体への参入の増加も南アフリカの場合のみで行われている。一時期、南半球の参入は統合のコントロールが難しくなるが、現在では参入の増加は今後の生産過剰の事態を招く場合の再びの参入を後退させるかと思われている。

表 91

リンゴ：南半球の供給状況 (1991/92)

1,000t

区分	アフリカ	オーストラリア	チリ	ニュージーランド	南アフリカ連邦	計
a. 生産量	1,100	312	780	459	581	3,232
b. 取引量	1,100	312	770	429	581	3,192
c. 輸入量	0	0	0	2	0	2
d. 供給量	1,100	312	780	461	581	3,234
e. 輸出量	270	32	396	239	256	1,192
f. 国内消費量	200	162	200	45	190	797
g. 工業加工	630	118	290	177	135	1,350
h. % (a)	25	10	51	52	49	37

出所: USDA

表 92

梨：南半球の供給状況 (1991/92)

1,000t

区分	アフリカ	オーストラリア	チリ	ニュージーランド	南アフリカ連邦	計
a. 生産量	300	127	166	16	217	826
b. 取引量	300	127	164	13	217	821
c. 輸入量	0	0	0	1	0	1
d. 供給量	300	127	166	17	217	827
e. 輸出量	170	32	116	3	105	425
f. 国内消費量	70	25	43	10	34	185
g. 工業加工	60	70	7	4	25	216
h. % (a)	57	25	70	18	48	51

出所: USDA

梨の場合もリンゴの場合と同様に北半球の生産が85%、消費が95%を占める。世界の輸出入量は年間で約80万トンであり、梨の場合もECが最大の市場となっている。南半球の輸入は皆無な状況にある。

南半球における梨の輸出は供給量の51%に達しており、リンゴの場合よりも比率が高い。世界最大の産国は、イタリ、オーストラリア、チリ、日本、トルコ、フランス等の諸国であり、南半球ではアフリカと南アフリカ連邦、チリ、オーストラリア、ニュージーランドが抜けている。

梨の輸出国の中でアフリカと南アフリカ連邦の輸出量はともに大きく、南半球では南アフリカ連邦とチリ、北半球ではオーストラリアとフランスとが輸出国となっている。また、EC圏内ではイタリ、フランス及びオーストラリアの輸出量が大きく、中でもフランスは産量も輸出量も大きく、EC市場における中絶基地の立場を示している。

世界の輸出国の中でフランスの輸入が大きい。全体の12.25%を占めており、EC圏内のフランス、オーストラリア、イタリ、北半球の残りの部分のオーストラリア、フランス及びオーストラリアの輸入も十分にある。世界の輸入統計に反映されている南半球ではフランスが唯一の輸入国であり、アフリカと南アフリカ連邦は輸入していない。

とつては 世界の市場と見られる。

梨の場合もリンゴの場合と同様に南半球から北半球の栽培期へ供給する立場になる。北半球の栽培期には供給国としての EC 諸国からの主たる競争は、 \times 年間の輸出分野に付く高度の成長が注目される。

梨の国際取引における特性としては競争が水産品に激しい市場である。その中心となる大企業が仲介していること、カルテリ化によること、又価格面から取引条件に有利な公開された透明度の高い市場である、一部の国や経済ブロックが特定の期間に限定して行っている規制を除く、特別の制約はない。

南半球から北半球に向ける行われたい供給形態は国々によって異なっており、一概には言えない。一部の国では南アフリカ連邦やオーストラリアでは政府が介入する取引委員会を通じて国際取引を行っており、これは EEC、ECF、EFTA 及び ECDF には民間主体である。

世界の消費市場における梨の嗜好の变化は、今後10年間のリンゴと梨の消費の落ちるに似ているという専門家的一致の意見がある。逆に品質の向上を要求する規制の強化は、リンゴと梨の需要の増大に代わって供給も拡大し、対峙する見方が強い。

表 93 リンゴ：世界の生産と輸出 1,000t

年度	生産	輸出	比率 (%)
1988	22,972.3	3,107.1	13.5
89	22,804.5	3,251.0	14.2
90	20,210.8	3,395.3	16.8
91	19,227.7	3,559.7	18.5
92	24,610.9	3,794.7	15.4
85-90 平均	21,995.9	3,251.1	14.8

出所: FAO

表 94 梨：世界の生産と輸出 1,000t

年度	生産	輸出	比率 (%)
1988	5,432.9	724.4	13.3
89	5,379.9	833.7	15.5
90	5,362.6	826.4	15.4
91	4,804.7	932.2	19.4
92	5,764.7	986.7	17.1
85-90 平均	5,325.7	897.9	16.8

出所: FAO

5.1.2 XILON-IVCの生産と市場

1. TIVCの分析

国内のVVCは及第の義務面積は約74千177-10に達し、初期のTIVC生産の中心地帯として、その義務面積は約15%の形勢を大別できよう。

a. 古い生産地帯：国内義務面積の12% 60%に相当するTIVC - 義務の平均面積は10ha程度。全般に投資VVCは低く、TIVC生産の最盛期はTIVC生産(20年程度)の60%程度。L2Pの品質は低く、品種の多様性が少ない。灌漑は運河からの勾配を利用する方法を用いたが、効果的な方法ではない。最近では大型灌漑の包摂全体に投資が傾向が強い。

b. 新しい生産地帯：義務の規模は50ha程度以上で義務投資は大型の投資が行われ、全般に灌漑が低く灌漑が大きい。果実の品種も量も義務より品質も高。

灌漑は英浦システムを用いたが、全体の約40%の灌漑は含まれる。

及第義務の水準と比較して、生産の平均水準は低く、以上の形勢は前者の1/2程度

の20%に達し、後述の60%は2倍の生産量である。

果物の場合は大半が新しい灌漑を用いたL2PのVVC生産の割合が約5%程度。

表 95 VVCの義務面積

年次	面積 (ha)				比率 (%)		
	義務(1)	生産(2)	義務(3)	割合(4)	(1)/(3)	(2)/(4)	(3)/(4)
1981	30.9	5.4	15.7	52.0	59	10	31
82	32.5	7.3	15.3	55.1	59	13	28
83	32.8	7.5	16.0	56.3	58	13	29
84	33.8	7.8	15.9	57.5	59	14	27
85	34.1	8.3	15.8	58.2	59	14	27
86	34.6	8.1	15.8	58.5	59	14	27
87	35.0	8.1	15.1	58.2	60	14	26
88	36.3	8.3	12.2	56.8	64	15	21
89	35.9	8.3	12.3	56.5	64	15	21
90	3/4	3/4	3/4	3/4	-	-	-
91	3/4	3/4	3/4	3/4	-	-	-

出所: FUNDACION MEDITERRANEA, SEAG.

注: 3/4 7-7-81

年度	面積 (1,000 ha)				比率 (%)		
	植付面積 (1)	収穫面積 (2)	収穫可能面積 (3)	合計 (4)	1/4	1/2	3/4
1981	9.0	1.6	6.5	17.1	52	9	39
82	9.6	1.2	6.6	17.4	55	7	38
83	9.7	1.2	7.6	18.5	52	6	42
84	10.8	1.3	7.6	19.7	55	7	38
85	11.0	1.4	6.3	18.7	58	7	35
86	11.1	1.4	6.3	18.8	59	7	34
87	11.5	1.4	6.2	19.1	60	7	33
88	12.1	1.7	4.1	17.9	68	9	23
89	3/0	3/0	3/0	18.0	3/0	3/0	3/0
90	.	.	.	3/0	.	.	.
91

出所: FUNDACION MEDITERRANEA. - SEAG

1人=2.6haの100%の工場は合計250haあり、そのうち25%の生産の60%を処理し、40%は残りの小型工場に分散して行われる。これらの小工場は果樹規模の60%以下である。

産物の100%は国内市場に供給され、輸出用のものは冷凍工場に貯蔵され、冷凍車によって港に運ばれる。鉄道輸送の方法が主流で、港に近い冷凍工場が主流のトラック輸送の利点がある。

海外市場向け輸出品は1人=47%、梨の60%は加工品として果糖や缶詰で出される。同様に果物の輸出は港にあるものの季節別と船積量の差が大きいです。

市場動向

上述の通りであるがアルゼンチンでは1人=の栽培面積は80年代の中期まで増加を続けてきたが、1985年以降は成長が停滞し、その後停滞の状況が続いている。

栽培面積の傾向と同様に生産量は1985年以降横這いの状況であり、年間100万トン前後の生産が続いている。89/90年度は果物の国内消費が減少し、92年以降は輸出が低下している。残りの生産は加工工場に供給され、現時点で産物の50%は加工原料として処理されている。

栽培面積の半分は0.15haの栽培形態で、栽培単位は小さく、従って投資も低く、旧来の栽培方法が残り、15ha以上の面積は30%程度で、国際市場に占める



下地としての栽培と収穫の品質も低い。

このため栽培形態は従来と異なり、新しい栽培形態による従来と異なり大規模な生産と
 共に、全体的な同様の競争力に弱める理由もあって、TIVUの生産は栽培と収穫とを
 他の問題として、品種の支持性も乏しいこと、これはRED DELICIOUS 種や GRANNY SMITH 種が
 大半を占めているが、これらの品種は主要輸入国にも必要が減少している品種である。

このほか、収穫と貯蔵に必要十分な水不足、換気不足、採送、貯蔵等々の問題を抱えている

これらの海外市場はフランスと最大の輸出市場として、オランダ、ドイツ、スイス等ヨーロッパ諸国
 への輸出量も大きい。国内市場も停滞している現在、海外市場への依存度が高まっているため、
 今後これらの海外市場の問題も抱えている。

- 最近のヨーロッパ市場への供給は減少している。価格も従来と異なり見合われる状態にあること
 ヨーロッパ市場の品種も従来の新しい品種への対応もできていない。

- 長年にわたり最大の輸出市場であるフランスのフランスと同様に従来と異なり
 減少を反映して輸入の減少が顕著であること。特に92年の輸入量は過去平均の50%
 下地に陥っている。

- フランス市場は関税の終了も事情も好転する市場統合計画（EU）の推進も
 による結果、この状況も24時間生産も同じ状況でも生産も増加する傾向も
 商品の品質管理も、輸送コストも有利な影響も受けつつある。

表 97

りんご：TIVUの栽培と収穫

年度	重量 (1,000t)				比率 (%)		
	生産量 (1)	輸出量 (2)	日消費 (3)	工場 (4)	(2)/(1)	(3)/(1)	(4)/(1)
1981	908.0	208.9	381.9	317.7	23	42	35
82	824.0	225.7	266.5	311.8	27	32	41
83	817.0	208.7	164.0	449.3	26	20	54
84	933.2	172.9	198.1	562.2	19	21	60
85	922.4	196.5	251.6	474.3	21	27	52
86	593.9	139.0	183.2	276.7	23	31	46
87	1,074.4	207.8	398.6	468.0	19	37	44
88	924.5	211.1	271.3	442.1	23	29	48
89	964.2	237.4	269.6	466.2	25	27	48
90	1,050.0	241.4	262.9	545.7	23	25	52
91	950.0	203.2	259.0	487.8	21	27	52

表 98 1/人: TIVEY への輸出推計

年表	産量 1000t	全産 1,000t/人	平均単価 US\$/t
1981	227.7	116.9	51.3
82	232.7	111.0	47.7
83	213.8	102.9	33.9
84	178.3	55.2	31.0
85	200.1	57.5	28.7
86	133.9	65.5	48.9
87	201.5	66.8	33.2
88	207.7	56.5	27.2
89	227.2	54.7	24.1
90	260.6	74.8	28.7
91	215.7	93.7	73.4

出所: CORPOFRUT POL. COM. EXP. ARGENTINO

表 99 1/人: TIVEY への輸出先別推計 1000t

輸出先国	1987	1988	1989	1990	1991
EC					
オランダ	42.2	50.6	46.3	60.5	46.1
ドイツ	17.6	25.6	29.8	23.4	32.5
スペイン	-	-	-	8.8	12.8
スイス	-	-	-	-	13.4
イギリス	1.4	2.3	4.8	2.2	2.5
ポルトガル	-	0.6	0.6	8.6	7.7
フランス	0.3	6.6	0.6	0.2	0.2
その他	-	0.1	-	-	0.2
小計	61.5	85.8	82.3	103.6	115.4
ラテンアメリカ					
ブラジル	99.1	79.4	97.9	92.0	55.0
ボリビア	1.2	-	1.3	-	-
コロンビア	0.2	1.0	0.3	-	-
その他	0.2	-	0.9	-	0.1
小計	100.7	80.4	100.4	92.0	55.1
スウェーデン					
スウェーデン	19.8	18.7	24.8	26.1	27.2
スイス	13.1	16.1	12.7	13.2	-
その他	1.4	1.2	0.6	0.6	-
小計	34.3	36.0	38.1	39.9	27.2
北アメリカ					
米国	11.1	8.2	16.7	6.0	9.5
その他	0.1	-	-	-	0.3
小計	11.2	8.2	16.7	6.0	9.8
その他	0.1	0.1	-	-	0.7
合計	207.8	211.0	237.4	241.9	207.2

出所: FUNDACION MEDITERRANEA

りんごの場合と異なり、トルコはかなりの量の増産を技術者による輸出志向による割合の年々増加による。過去10年間の推移をみると前年比輸出量は概して増加傾向にある。この増産は技術者による割合は81年の27%から91年には59%に達している。通関料消費量は58名から25名へ減少し、工業原料消費量は15-16名で変わっている。

表 100 梨: トルコへの輸出と化向先

年度	生産 1,000t				消費 %		
	生産 (1)	輸出量 (2)	国内消費 (3)	工業原料 (4)	(2)/(1)	(3)/(1)	(4)/(1)
1981	130.0	34.9	75.9	19.2	27	58	15
82	137.5	57.9	19.2	60.4	42	14	44
83	202.0	68.9	40	40	34	20	20
84	167.0	52.0	40	40	31	24	24
85	192.5	76.7	75.7	39.9	40	40	20
86	164.9	58.0	68.2	38.7	35	41	24
87	252.1	95.2	95.1	61.8	38	38	24
88	201.0	115.2	57.9	27.9	57	29	14
89	217.3	134.2	40.1	43.0	62	18	20
90	275.0	151.0	69.9	54.1	55	25	20
91	270.0	158.9	67.5	43.6	59	25	16

出所: FUNDACION MEDITERRANEA - CORPOFRUT

我が国は1980年以降はほとんど同様の規模で生産増産を続け、トルコは輸出志向による増加傾向にある。他方トルコは減少傾向にある。両国はかなりの栽培面積の増加を示している。トルコは1980年代後半から進出の動きがある。栽培技術も新しい技術を導入している。栽培技術は肉質のよい品種とおいしい品種の導入が行われている。増産傾向にあるトルコは2027年までに生産増産を技術者による理由がある。栽培管理と技術者の投入はりんごの場合よりもかなり大きい。

この増産はトルコは北半球、これはEC圏に最大の供給源となる位置に付いている。輸出市場はりんごの場合と同様にトルコは最大の市場である。EC圏中トルコへの輸入は増加している。EC圏を中心とする北半球への輸出は1985年以降は増加している。最大の市場であるトルコへの輸入は1990年以降は90年代初は下降している。91年には12-1.名に減少している。りんごの場合と異なり、トルコは梨の国内産はトルコへの輸入に依存している。トルコは同様にかなりの減少、トルコは最近の購買力下落と価格の下落を解決している。

表 101

梨: 1971-91年輸出推移

年次	重量 1,000t	金額 1,000Fu	平均単価 152/b
1981	36.3	25.5	702
82	62.8	34.7	554
83	68.9	27.0	391
84	52.0	18.5	355
85	76.7	27.2	355
86	51.3	23.1	450
87	97.2	43.6	449
88	116.2	50.8	437
89	142.2	49.0	344
90	158.0	62.7	397
91	155.2	83.9	540

出所: FUNDAÇÃO MEDITERRANEA.

表 102

梨: 1987-91年輸出先別

1,000t

輸出先国	1987	1988	1989	1990	1991
E C					
イタリ-	21.1	29.2	35.8	38.5	41.8
フランス	13.4	16.9	13.5	21.3	21.9
ドイツ	6.5	18.9	14.7	17.9	13.1
ブラジル	1.5	3.2	1.7	2.7	4.8
その他	0.1	-	-	9.3	1.3
小計	42.6	57.7	65.1	80.7	91.9
アメリカ					
ブラジル	39.2	45.3	49.0	51.4	46.7
その他	-	-	-	-	0.2
小計	39.2	45.3	49.3	51.4	46.9
北アメリカ					
米 国	7.4	7.4	13.7	11.8	13.9
その他	0.4	0.5	-	0.2	-
小計	7.8	7.9	13.7	12.0	13.9
その他の国					
スウェーデン	5.1	4.3	5.2	5.2	4.7
その他	0.5	1.0	0.9	1.7	0.9
小計	5.6	5.3	6.1	6.9	5.6
その他	0.2	-	-	-	0.6
合計	95.4	115.2	134.2	151.0	158.9

出所: FUNDAÇÃO MEDITERRANEA.

4) ブラジル

ブラジルは伝統的カニ生産国で、輸入代替型に用いる革新的な融
資面、技術援助面等、板井氏が80年代前半に急速に拡大し、現在そのカニ
加工品は、南米3位の生産国として自給率を高めている。

同国の生産地帯は南部5州に集中し、中でも「カニ」の生産中心地帯は、
50%以上が集中する。南部のカニは、加工品として40%の生産に
加工し、南東部の加工品は、加工品として生産されている。

養蚕面積は、80年代前半から90年代前半にかけて25千ヘクタール前後に停滞し、
及び増加傾向にある。1ヘクタールあたり88千個、98千個、93千個、137千個、
24千個及び生産量の増加を示している。生産性向上は、統制中心地帯の
加工品は、加工品として生産されている。同国のカニは、
1,300の養蚕戸は、養蚕に従事しており、年間約100万人の従事者
を養蚕部門に構成している。州の主要経済部門は、

表 103 ブラジルのカニ生産面積

年度	養蚕面積 1,000ha	収穫面積 1,000ha	生産量 1,000kg	収率 kg/ha
1984	19.0	19.0	1,278.9	67,310
85	20.1	20.1	1,443.2	71,800
86	21.0	21.0	1,779.0	84,714
87	21.0	21.0	1,668.2	79,438
88	22.4	22.4	2,196.6	98,268
89	21.1	20.9	2,386.9	114,365
90	22.3	22.3	2,777.6	124,663
91	25.8	25.6	2,634.5	102,791
92	24.2	24.1	2,997.0	124,284
93	25.5	25.4	3,448.0	137,226

出所: IBGE 87年30養蚕面積の統計は、推定値である。

表 104 ブラジルのカニ生産性

州別	収穫面積 1,000ha	生産量 100kg	収率 kg/ha
サンパウロ州	12.3	1,896.2	153,615
パラナ州	10.6	1,325.2	124,907
ミナスジェリス州	1.7	184.1	108,294
リオグランデ州	0.7	83.5	114,252
全国平均	25.9	3,488.0	137,226

出所: IBGE

生産中心地帯の中心地帯での栽培面積が拡大したと見られ、最近の急増が現れ
 始めている。しかし拒絶後5-6年の若木が主産後階に入るとは、その若木は古い栽培
 地帯所に出る前に、栽培面積も従来と比べて1.5倍近く、高反収の予想が示されている
 今後の栽培面積の増大が期待されている。

同様に GALA 種と FUJI 種も主産地帯であるが、この品種は輸入国で好まれる品種
 であり、その生産量は、従来よりも倍増している。この中、GALA 種の場合、
 他品種よりも1月早く2月に収穫に入ると、EC市場でもこの品種不足の時期は、供給不足と
 いう強味がある。

このように見ると、フランスの PWDVTV、相、利一、ハナハナ 等は、他産地帯に輸入の代替
 としてあり、91年以降は輸入量の従来50%を越え、1991年、生産量の10%を過す
 に輸出するようになった。同日相変り等は、依然として低く、1人平均 2.37kg にすぎない。

表 105 フランスのりんご生産額

年度	産量 (t)	金額 (US\$1,000)	平均単価 (US\$/t)
1988	608.4	229.7	377
1989	3,038.5	1,129.0	371
1990	4,293.0	2,522.2	401
1991	3,306.5	1,684.1	509
1992	32,549.8	20,624.3	634

表 106 フランスのりんご輸入市場 (1992年)

輸送元国	産量 (t)	金額 (US\$1,000)	平均単価 (US\$/t)
ベルギー	17,948.7	11,357.2	655
オランダ	10,601.5	6,106.8	576
英国	2,477.1	2,115.3	608
ドイツ	445.5	377.8	848
米国	314.9	334.7	1,063
その他	262.1	332.5	918
計	32,549.8	20,624.3	634

出典: DECER.

フランスのりんご生産額は、1991年まで最高6千t程度で輸出収入も250万ユーロに限定
 されていた。92年には、フランスと同様のりんご (GALA 及び FUJI) の供給国であり、フランスは過剰国
 となり、EU-27の天候不順 (降雨、降雪) により、生産量が減少したため、フランスは輸出需要の
 急増に伴って32千tの輸出、20万ユーロ以上の外貨を獲得している。

1. 1980年代

1) シェンゲン

積付面積の拡大と蒸化率、2,500 ~ 3,000 ha/haの間で上下。年産量は35T/ha程度に減少、平均単収は15t/haである。1986年の栽培面積は1haあたり200本であった。

1. 栽培面積の平均面積は増加傾向にあるが、これは大型栽培の出現を示すものとして、同時に近代技術の導入も意味している。

輸出量及び工業用需要は減少しており、国内産の大部分は国内消費に向かっている。国内消費水準は高し、1992年において1人年間5,10kgの消費量であった。現在においては包蔵や冷凍貯蔵の施設を擁するに、国際市場との競争力は低い。モンテネグロは木深の深い自然流下河川と比較して、澆灌面積の低さから国際競争力を持つ条件は備えておらず、今後の生産動向は不明である。

梨については総面積が1,000 ha/haに達する規模にあるが、増加傾向にはある。反収は1haあたりと同レベルの14t/haを記録している。生産物の大半は国内消費に向かっている。消費量は1人年間325kgのレベルで、木質の上廻りである。生産物の10%は隣国のフランスに輸出されている。

2) ポロニア

リンゴ及び梨の国内生産量は減少している、消費量は減少している。L-シシムロ2-10a中ではTILWVTV及びTAVV産品の対内市場と外市場とを占めている。92年にはPILWVTVの増産を計画している。

これは、これらの品種はL-シシムロ2-10aの中でのリンゴ及び梨部門は増加傾向にある。

- PILWVTVは伝統的に生産国でL-シシムロ2-10aの中で最大の生産規模を有しているが、最近では生産規模が拡大しており、かつその大きさが利益率に占めている。フランス市場をターゲットとする。
- フランス政府が導入した輸入代替政策の恩恵は、80年代以降急速に生産を拡大して自給率に近づいている。近い将来、北半球に生産競争力と供給力を持つことが可能である。

- シェンゲンは国内産の大部分を国内消費しているが、92年にはTILWVTVの減少傾向を補うべく、輸入の増加を計画している。

表 107 X1622-104 計43 リンゴ 生産状況

国別	a) 1991	b) 1992	c) 85/90 平均	% (b)
アメリカ合衆国	950,000	939,000	921,567	3
フランス	333,800	348,600	270,869	19
ドイツ	564	566	588	(-) 4
イタリア	34,600	28,798	30,681	11
X1622-104計 A	1,318,964	1,307,958	1,223,705	7
生産総量 B	19,227,700	24,610,900	21,995,867	(-) 14
A/B (%)	6.85	5.31	5.56	-

表 108 X1622-104 計43 梨の生産状況

国別	a) 1991	b) 1992	c) 85/90 平均	% (b)
アメリカ合衆国	270,000	260,000	217,133	20
フランス	-	-	-	-
ドイツ	160	161	158	1
イタリア	12,000	12,604	14,390	(-) 20
X1622-104計 A	282,160	272,765	231,682	18
生産総量 B	9,806,700	5,764,700	5,325,133	(-) 11
A/B (%)	5.87	4.73	4.35	-

表 109 X1622-104 計43 リンゴ 消費量

国別	a) 1991	b) 1992	c) 85/90 平均	% (b)
アメリカ合衆国	746,769	735,111	716,874	9
フランス	353,752	*	404,214	(-) 14
ドイツ	*	*	*	*
イタリア	34,022	29,374	39,529	10

* 資料なし

表 110 X1622-104 計43 梨の消費量

国別	a) 1991	b) 1992	c) 85/90 平均	% (b)
アメリカ合衆国	111,139	91,774	112,070	- 1
フランス	46,730	*	39,540	15
ドイツ	*	*	*	*
イタリア	19,963	11,910	13,592	- 24

* 資料なし

表 111 X1622-104 計43 梨の輸出量

国別	a) 1991	b) 1992	c) 85/90 平均	% (b)
アメリカ合衆国	158,861	168,226	105,064	34
フランス	0	0	0	*
ドイツ	*	*	*	*
イタリア	1037	707	1,597	- 64
X1622-104計 A	159,898	168,933	105,862	34
生産総量 B	932,200	986,700	794,833	57
A/B (%)	17.1	17.1	13.3	-

* 7-1-1 凡

5.2 かんきょ類

5.2.1 国際市場動向

1) 概要

商業ベースで行われる世界のかんきょ栽培は面積、栽培技術、品種、市場にそれぞれ差異はありながら、全般的に増加傾向にある。産地の増加は栽培面積の増加による場合が大半である。

かんきょ栽培は収穫期と成熟期の肉体的と比べず、1地域は収穫期と成熟期はそれぞれ別の市場に供給される。北半球は世界のかんきょ、産地は70~80%が集中する地域である。春から夏にかけては成熟期は南半球の産地供給者の主場である。なかには北半球にもある。

世界のかんきょ栽培は熱帯、亜熱帯の地域で水不足は地域で行われる。この条件下に産地帯は一部の例外を除いて南北の緯度20~40度の範囲に集中する。この緯度帯に集中する主要産地帯は次の通りである。

北半球： 北米： 米国、メキシコ

ヨーロッパ： スウェーデン、フィンランド、イギリス

アフリカ： アルジェリア、エチオピア、モロッコ、ツタン

アジア： 中国、インドネシア、インド、イラン、イスラエル、日本、レバノン、パキスタン、イラク、シリア、トルコ

中米： キューバ、ホンジュラス

南半球： 南米： アルゼンチン、ブラジル、パラグアイ、ウルグアイ、チリ

アフリカ： 南アフリカ連邦

大洋州： オーストラリア、ニュージランド

1992/93 年度における世界のかんきょ生産量は72億トンと推定されている。これは24年ぶりに推定値である。90~93年の平均は84~86年の平均値と比較すると26.1%の増加であった。この期間中、メキシコ、キューバ、アルゼンチン、スウェーデン、トルコに大きな増加があった。反面伝統的な産地帯の米国、イスラエル、イランは生産の減少が記録されている。

米国農務省(USDA)が主要産地帯を対象として行った調査結果によると、90年、最終的な生産量は49.2億トンで、91/92年には52.1億トンに伸びた。世界的な生産傾向は維持されているとされている。

1992/93年度は、この最終的な生産量は、北半球は13%の増産であった。産地は32億トンと推定されており、65億トンが輸出、11.1億トンが工業用原料、残りは国内消費された。

南半球では15.8百万トンの産量の中、7.8百万トンが工業原料として処理され、560千トンが果物としての輸出であった。

表 112 かんきつ：世界の産量 (1000トン)

国別	84/86平均 (A)	1990	90/93平均 (B)	(A/B)増減
ブラジル	11,502	12,257	14,399	25.2
米国	8,099	8,241	10,923	34.9
スペイン	3,333	4,159	4,660	39.8
メキシコ	2,011	3,169	3,410	69.6
イタリヤ	2,366	2,705	3,151	4) 6.4
トルコ	1,399	1,728	1,605	14.7
イスラエル	1,440	1,280	1,095	4) 23.9
エジプト	636	1,020	1,006	58.2
南アフリカ連邦	725	1,101	931	28.3
シリア	146	195	235	61.0
その他	22,292	21,445	29,283	31.4
合計	54,949	68,300	69,317	26.1

出典: FAO, USDA. 注) 93年以降は推定値を含む。

かんきつの種類としてオレンジ、レモン、ライム、グレープフルーツ等の中でオレンジの産量の圧倒的に大きくなり、90~93年の平均ではかんきつ産量の72%を占めている。又84/86年間の平均産量と90/93年の平均とを比較すると30.2%の増加であった。ミロニールの産量は90~93年平均で世界産量の28%を占めており、上期と同様に23.6%の増加が記録された。一部の産国(南アフリカ、シリア、エジプト)における政府の生産振興策、液滴オレンジ、VZ-2の国際価格上昇と利益増進による生産の増加(ブラジル、トルコ)にもよる産量の増加がみられる。

世界のオレンジ生産国の中でブラジルの産量最大規模を占めており、世界産量の26%を占め、ブラジルの国内かんきつ産量の90%はオレンジである。国内産量の80%はオレンジに集中し、ブラジルのオレンジ産物の特徴的な産物の大半は工業原料としての加工用途向けに輸出され、生産コストの削減と国内向けに輸出する競争力のある輸出品としての地位を保持している。

特にブラジルの大型産国である。ブラジルの場合と異なりオレンジ原料としての用途は世界最大の消費国であり、又オレンジ産果の大型輸出国でもある。国内産量等は大きく2つの地域に分けられ、輸出用及び国内消費用産果の産地はカリフォルニア、オレンジ、VZ-2用オレンジの産地はフロリダに集中している。

中国の産量は1970年代は240千トンと上流産地である84~86年と比較して2百万トンと急激に増加。

1. 最近、今日まで4.7倍と推定されている。同国でも同じような報告されているオランダでは収穫時期に適した品種の改良や栽培技術の向上が原因とされている。近いうちに世界市場において競争力向上の策が可能性ある。

EC国ではスペインに次いで最近の栽培の増加が顕著である。スペインは1986年1月にECに加入した。ECの内部規程は、1996年までに先進国と同等の競争力を目指すという目標があり、政府は企業グループと共にこの時期にわたる過渡期間を短縮する目的でECに交渉中である。スペインはECの主要産国の1つで、ECに次ぐ伝統的な生産国である。

表 113 トマト：世界の生産量

国 別	89/90 平均 (A)	1990	90/93 平均 (B)	(A)(B) 増減%
ブラジル	10,647	12,150	13,197	23.9
米 国	6,607	6,897	8,116	23.6
中 国	2,011	9,700	9,700	133.7
スペイン	1,801	2,419	2,626	45.8
メキシコ	1,237	2,200	4,425	96.0
エジプト	1,170	1,390	1,581	35.1
イタリ-	2,115	1,655	1,945	(1) 8.0
モロッコ	776	810	911	17.4
トルコ	663	600	741	11.8
南アフリカ連邦	989	610	687	42.0
アルゼンチン	595	750	660	10.9
その他	10,149	14,719	12,217	20.3
(注) (A)	(58)	(81)	(116)	(100.0)
合計	38,255	48,900	49,806	30.2

出所: FAO, USDA (注) 93年4月現在推定値

世界の生産量はブラジルと中国がトルコよりも伝統的に生産国であり、それぞれ1.3%のシェアを占めている。ブラジルの国内生産量は大半は工業用として輸出されており、トルコはトルコ産の輸出と北半球の過渡期にある生産国に絞られている。この中で南アフリカ、キューバ、オーストラリア等と競争する。品質からしてトルコ産の競争力は高水準であり、北半球の生産国に絞られている。同国は最近の栽培増加率の高さ、80年代前半の90年代当初に比べて100%の栽培増加を記録している。90/93年の平均で世界の生産量の0.23%を占めている。ブラジルとトルコは生産量の減少である、世界の生産国に絞られている。

ロ) 世界のりんごの生産輸出

世界のりんごの生産輸出は 1991年より前年より増加しており、92、93年ともほぼ同様の水準にある。世界の生産輸出国の中で最大の生産輸出量は中国で、91年と比較して34.4%増加している。中国に次ぐ生産輸出量は837千トン(11.2%)、92年には1,100千トンに伸びた。中国は最大の輸出国である。モロッコ、アメリカ、南アフリカ連邦、ギリシャ、トルコ、ブルガリア等は主要輸出国とされている。USDAのデータに基づいてトルコを産物別に分けると世界のりんごの輸出は次の通りである。

表 114

世界のりんごの輸出 1991-92年

国 別	アメリカ		その他		計	
	1991	1992	1991	1992	1991	1992
スウェーデン	1,150	1,232	1,424	1,165	2,574	2,397
米 国	233	295	604	616	837	1,111
モロッコ	550	360	139	171	689	531
南アフリカ連邦	317	343	122	102	439	445
イスラエル	190	169	153	163	343	332
アメリカ	275	130	198	103	473	233
ギリシャ	303	270	42	42	345	312
トルコ	92	69	146	155	238	224
その他	990	*	837	*	1,827	*
計	9,100	*	3,665	*	9,765	*

出所: トルコ産物

*: データ無し

世界のりんごの輸出の中で最大の取引量を占めるのはアメリカである。スウェーデンは最大の輸出国とされている。中国はスウェーデンに次ぐ最大の輸出国であるが、1991年には中国産りんごの輸出量が急激に減少したことが輸出量を減らしている。92年には平常に戻っている。モロッコは91年に国内生産量の50%を輸出した。中国は最大の輸出国となった。輸出市場は主にヨーロッパと北米に集中している。トルコは91年に国内生産量の半分以上を輸出した。中国は91年に国内生産量の半分以上を輸出した。

中国産りんごの輸出はトルコを産物別に分けると世界のりんごの輸出の中で合計すると、91年には92千トンの輸出が行われた。トルコは中国産りんごの輸出は1991年に138千トン、92年に97千トン、中国産りんごは99千トン、トルコ産りんごは87千トンの輸出が行われた。

5.2.2 中国産りんごの生産と市場

1. トルコ産りんご

Pluvial area 及び Pluvial area 各区域におおむね一致して行われていたことが、エッセイ
 板、リエントス及びツツメツツ、北西地方の産地、国内消費用、生果としての輸出用、及び
 業務用の各粒の目的による産地が行われていた。国内産地面積は果実栽培面積の約4分の
 1に相当する140千ヘクタール。80年代の後半にはその栽培面積の減少が回復していった。この
 栽培面積の回復は、レモンとマンゴーにみられる。オレンジとグレープは減少傾向が続いている。
 1981/82年、1985/86年、1991/92年と比較すると、次の如きである。

表 115
 単位: Pluvial area 栽培面積 (ha)

種類別	1981/82	1985/86	1991/92
オレンジ	68,100	60,700	59,380
マンゴー	28,500	30,050	36,700
レモン	27,000	27,100	29,800
グレープ	16,600	13,650	11,248
計	140,200	131,500	137,128

出所: 147A - SAGP.

上表にみられるように、オレンジの栽培面積は、80年代前半には171千ヘクタールに増加したが、80年代の
 中期に減少した。80年代後半には回復傾向が見られる。この10年間の面積変化は、オレンジの面積は、
 4粒種の中でマンゴーとレモンは栽培面積が増加した。オレンジとグレープは減少傾向にある。オレンジ
 は、オレンジの中期後半には70,400 haと比較して約15%の減少が見られる。これは、
 主にミッドウェスト地方の減少が大きい。オレンジ及びツツメツツはともに減少が見られる。
 国内の産地帯としてのエッセイ板、リエントス及びツツメツツ、北西部において栽培が拡大。国内消費
 用、輸出用及び業務用としてPluvial area 産地が行われていた。

表 116
 単位: Pluvial area 別栽培面積 (ha)

州別	1981/82	1985/86	1991/92
リエントス	23,750	22,300	24,722
エッセイ板	18,000	18,600	16,100
ミッドウェスト	9,300	3,300	2,600
ツツメツツ	5,000	5,000	4,260
グレート・プレーンズ	3,540	3,500	5,452
サウス	3,700	3,550	3,000
その他	2,630	2,600	2,300
その他	2,180	1,850	946
合計	68,100	60,700	59,380

出所: SAGP.

アレンVに於けるかんまの生産量は1981/82 ~ 90/91年間に約20%の増加を記録し、
 種類別ではLEMの生産増加率の最も高い36%、グレート・フルーツが18%、次に次いで
 YレンVにマングローブの栽培面積の傾向と同様に減少し、減少は6%及び2%であった。
 次表はアレンVに於けるかんまの生産量の推移を示したものである。

表 1.7 かんま : アレンVの生産量

種類別	1981/82	1985/86	1991/92
アレンV	668,000	623,200	690,000
LEM	356,870	421,390	565,000
マングローブ	237,000	243,400	200,000
グレート・フルーツ	150,000	177,940	180,000
計	1,411,870	1,465,930	1,585,000

出所: INTA - SAG

生産量、輸出量共に最も大きいアレンVの主要栽培地帯と見られる地帯に交通の便が最も

1) アレンV及びマングローブ

栽培品種 : 早熟種 27%、中熟種 12%、合計、61%
 栽培面積 : かんまの栽培面積の 50%
 生産量及び収収 : 1991年 80.9 千tV、1 haあたり 23 t
 収獲物の仕向先 : 国内市場 60%、海外市場 18%、工業原料 22%

2) ツロマン

栽培品種 : アレンV、マングローブの場合と同様
 栽培面積 : かんまの栽培面積の 19%
 生産量及び収収 : 1991年の生産量 65 千tV、収収 : 1 haあたり 30 t
 収獲物の仕向先 : 国内市場 89%、海外市場 11%、工業原料 0%

3) エントウ、ハリス、コリエータ、ニゴ-キ、及びフレック、アリス 各州

栽培品種 : 早熟種 ~ HAMLIM - WESTIN、中熟種 WASHINGTON、NAVEL - BUCKEYE
 品種 : VALENCIA LATE PERA、VALENCIA SEGOLES、CALDERON
 生産量 1991年 : エントウ、コリエータ及びニゴ-キ計 415.5 千tV、フレック 52.5 千tV
 収収 : " " 29.5 t/ha、18 t/ha

収獲物の仕向先(%) :

	エントウ、コリエータ	ニゴ-キ	フレック
国内市場	56	19	80
海外市場	19	1	17
工業原料	25	80	3

表 118 77Vの土壌推定

水取年度	水取面積 1000ha	生産量 100万kg	平均収取 kg/ha
1984	632.0	64,613.0	102.255
85	663.1	71,071.5	107.180
86	707.3	66,872.2	94.478
87	725.6	73,568.8	101.390
88	815.8	76,471.6	93.733
89	853.7	86,110.3	100.868
90	928.3	86,148.7	92.805
91	980.8	94,512.3	96.366
92	986.5	98,285.7	99.629
93	745.8	85,490.2	114.623

出所: 1992

表 119 77Vの土壌推定 (1993年) ()の単位

地域及び州別	水取面積 1000ha	生産量 100万kg	平均収取 100kg/m
北部地区	1.1	1123.7	86.2
東北地区			
青森県	38.5	3,933.0	102.2
岩手県	39.2	2,663.7	68.0
秋田県	9.3	703.9	-
小計	87.0	7,300.6	83.9
中西部地区	8.3		
南東地区			
千葉県	531.2	68,775.0	129.5
茨城県	58.1	2,535.2	66.5
栃木県	28.2	1,421.0	59.5
群馬県	2.4	163.1	-
小計	599.9	72,894.7	121.5
南部地区			
佐賀県	27.9	2,301.3	82.5
熊本県	9.6	1,164.9	-
小計	37.5	3,466.2	92.3
全国計	745.8	85,490.2	114.6

出所: 1992

1992 (77Vの土壌推定) の統計の収取は 77 生産: 現状 1000ha 単位 → 推定
 672 生産量 = 1000ha 単位 国内産量 1000ha 単位. 表現 1000ha 平均 40.8kg/ha 1ha
 1000ha 単位. 1000ha 単位 約 300 万ha, 平均 1000ha 単位 約 250 万ha 単位.
 国内産量 1000ha 単位 1000ha 単位 採算 70%

表 120

Fiji Vna 炭疽菌 V. V2-ス 輸出推移

年度	数量 1,000kg	金額 FOB 100円	輸出平均単価 US\$/kg
1982	521.1	573.4	1.100
83	553.1	608.0	1.099
84	904.8	1,414.5	1.563
85	484.8	748.9	1.544
86	808.3	682.2	849
87	755.0	830.5	1,100
88	663.6	1,143.3	1.724
89	723.9	1,019.0	1.407
90	953.9	1,468.4	1.539
91	913.5	899.9	985
92	967.2	1,052.8	1.088
93	1,165.2	826.2	709

出所: CACOR, DECEX

表 121

Fiji Vna 炭疽菌 V. V2-ス 輸出生市場 (数量)

1,000kg

輸出生国	1991	1992	1993
オランダ	331.9	350.5	454.0
米 国	223.3	331.6	339.1
ベルギー	112.7	127.8	196.3
日 本	24.9	35.6	63.0
韓 国	39.9	36.0	34.0
英 国	10.8	21.2	25.1
カナダ	59.9	19.6	10.1
ドイツ	22.3	19.1	2.9
フランス	3.8	4.9	2.3
ポルトガル	3.3	4.0	5.0
オーストラリア	11.6	4.3	6.6
その他	14.4	19.0	25.8
計	913.5	973.6	1,165.2

(金額)

オランダ	322.5	373.9	318.3
米 国	282.5	357.8	262.8
ベルギー	106.8	144.8	121.6
日 本	25.7	51.4	39.1
韓 国	41.8	41.3	25.0
英 国	10.8	20.8	17.4
カナダ	53.8	19.0	7.0
ドイツ	22.7	11.5	5.3
フランス	3.9	5.2	5.0
ポルトガル	3.9	4.9	7.1
オーストラリア	12.8	3.1	3.5
その他	12.7	19.6	17.1
計	899.9	1,052.8	826.2

ハ) パラグアイ

表 122

オレンジの生産推移

年次	面積 1,000 ha.	栽培本数(1,000本)		生産量 1,000 t
		生産中	生産前	
1982	11.6	4.3	1.8	352.9
83	11.6	4.3	1.4	356.5
84	11.7	4.4	1.4	352.8
85	11.8	4.4	1.4	341.1
86	12.0	4.6	1.5	274.9
87	12.2	4.9	1.2	352.3
88	12.2	5.1	1.3	363.8
89	12.2	5.1	1.3	364.3
90	12.2	5.1	1.3	366.3
91	10.2	2.4	*	177.2
92	10.2	2.4	*	178.7

出所: PRODUCCION AGROPECUARIA - SINTESIS ESTADISTICA

*: 推定値

注) 91年及92年の栽培本数は、推定値である。

表 123

オレンジのパラグアイ生産比率(1992)

地域別	面積 1,000 ha	栽培本数(1,000本)	生産量 1,000 t
イタパ	3.1	1,032.9	29.9
サン・ロドリゴ	0.8	173.4	19.0
カアブラス	1.3	323.0	26.7
ティフ・ボタ	1.2	313.3	20.4
ゴビエラ	0.6	160.9	17.5
その他	3.2	819.0	55.2
全国計	10.2	2,822.5	178.7

出所: PRODUCCION AGROPECUARIA - SINTESIS ESTADISTICA

5.3 ぶどう

5.3.1 ヌルヴーの生産と市場

ヌルヴーは4ヶ国におよぶぶどうの生産の年間平均の3割に達し大半がぶどう酒原料。少量が食卓用と採りて消費される。ぶどう酒の生産は年間230万リットルである。

国内で最大の生産国はブルベルクで国内生産量の80%が同国に集中する。フランスは全体の10~15%、残り1割がイタリアと年々5%~10%のシェアを奪取する。イタリアの生産には見よわぬものがある。

ブルベルクの生産はぶどうの15%が高級ぶどう。80%が工業原料用、5%が食卓用及びぶどう酒に消費される。全生産量の95%はぶどう酒原料とされる。フランスのぶどう酒の市場も同様の状況で全生産量の97%は工業原料に向かっている。

ブルベルク国内ではオーストリア及びオランダに国内ぶどうの生産の90%が集中し、工業原料の割合は95%の集中率がある。又国内の消費はブルベルク、ドイツ及びオランダの3ヶ国に集中する。ぶどうの生産量は年間250万トンの平均とされている。

国内の栽培面積は、209千ヘクタール(92年)で36ヶ年連続で栽培面積を増加している。1ヶ年あたりの栽培面積は0.5haである。ぶどうの72%の栽培面積は5ヘクタール以下の小面積で占められている。1ヘクタールあたりの収量は10tV程度である。

フランスでは1haあたり1.2tV、オランダ及びオーストリアは1.5tV程度でぶどうの生産は中程度の生産力にあり栽培規模は最大である。国内の栽培面積は57千ヘクタール、うちフランスは40千haの栽培面積を占めており16ヶ年連続で栽培面積を増加している。同国には1ヶ年あたりの栽培面積が2.2ヘクタール、1ヘクタールあたりの収量は12トンの生産がある。

国内生産の67%はぶどう酒原料で、残りは食卓用と供給される。1996(フランス統計院)のデータによると全国平均の生産量は780~800千tV、その90%はフランス国内で生産されている。

国内生産量の大半はぶどう酒原料に用いられる。年間約260万リットルを推定する。国内の大半(97%)は国内市場に向かうが3%は輸出される。国内の1人平均消費量は1リットルと日本と比べてかなり少ない。国内供給不足を補うために年間約10万リットル(国内生産の4%)の輸入が行われている。輸入はブルベルクが10%、フランスが25%、ドイツが65%の割合で行われている。

アメリカ合衆国に於ける牛肉の生産は、モントゴメリー (16%)、カネオ-ベ (65%)、サニタ (5.5%)
 及び 202P (6%) の 4社に集中している。牛肉の消費は、牛肉に集中している。
 国内最大の消費市場はモントゴメリーである。

牛肉の生産は年間 113万トンを、その大半 (97%) は牛肉の原料である。残りの牛肉は消費
 である。牛肉の消費量は、約 85万トン/年であり、その 99% は国内市場に由来している。1人当りの
 消費量は 30kg で、国内消費量は、牛肉の生産量よりも高い水準にある。国内供給量の不足を補うために、牛肉
 の生産量 (国内消費量の 2倍) の輸入が行われている。最大の輸入先は、アメリカ合衆国、
 70%、チリ、5.2%、EC 10% の割合で輸入されている。

アメリカ合衆国の牛肉の生産は、牛肉の生産量の約 20% を占め、牛肉の国内消費量の約 10% を輸入品
 に依存している。

アメリカ合衆国は、牛肉の生産量は、年間約 2000万トンの牛肉の生産を行っている。牛肉
 の生産量は、牛肉の生産量の 8% に相当する。国内最大の生産国は、アメリカ合衆国、牛肉の生産量の 90% を
 占めている。国内で消費する牛肉の大部分は、国内で消費されている。牛肉の輸出は、牛肉
 の生産量の約 1% に達している。牛肉の輸出量は、牛肉の生産量の約 0.5% に達している。

アメリカ合衆国は、牛肉の生産量は、牛肉の生産量の約 20% を占め、牛肉の国内消費量の約 10% を輸入品
 に依存している。牛肉の生産量は、牛肉の生産量の 8% に相当する。国内最大の生産国は、アメリカ合衆国、牛肉の生産量の 90% を
 占めている。国内で消費する牛肉の大部分は、国内で消費されている。牛肉の輸出は、牛肉
 の生産量の約 1% に達している。牛肉の輸出量は、牛肉の生産量の約 0.5% に達している。

国内最大の生産国は、アメリカ合衆国、牛肉の生産量の 90% を占めている。国内で消費する牛肉の大部分は、国内で消費されている。牛肉の輸出は、牛肉
 の生産量の約 1% に達している。牛肉の輸出量は、牛肉の生産量の約 0.5% に達している。

表 124 牛肉の生産と消費の状況 (単位: 1,000トン)

国別	1989	1990	1991	1992
アメリカ合衆国	2,292.0	1,774.0	1,705.0	*
ブラジル	274.0	311.0	204.0	256.0
オーストラリア	85.0	94.0	89.0	80.0
その他	*	*	*	*
計	2,656.0	2,179.0	1,989.0	*
世界生産量	*	27,950.0	24,650.0	17,990.0

* 7-7-96

5.4 カヴ-トナ

5.4.1 ブラジルの産地と市場

カヴ-トナはブラジルの東北地方に生産され、大規模な産地として知られる。アフリカやインドに比べて生産量は少ないと見られる。世界の産地帯はブラジルのパラナ州、モナシオン、カンチーナ及びサンパウロに集中しており、1977年時点ではブラジル大陸の産地帯最大であった。77-85年間はアフリカの産地帯の増産が顕著であった。アフリカの産地帯は今後の増産の見込みが不明で、ブラジルでも政府による植林奨励の枠内にあるため、調査分野でも急速な増産が予想されることから産地の維持に留意する見通しがある。海外市場は欧米とアジアに広がる。

世界のカヴ-トナは供給の逼迫、アフリカの産地帯の減少と欧米の産地帯の回復に注目が集まる。今後アフリカ及びインドでも出現する可能性がある増加傾向にある。

表 125 世界のカヴ-トナ産地帯

国別	1970-72		1980-82		1990-92 推定	
	1,000ト	%	1,000ト	名	1,000ト	%
ブラジル	26.7	6.8	77.9	25.1	132.5	29.0
インド	60.0	15.3	125.7	37.1	137.3	30.0
モナシオン	171.0	43.5	59.5	17.6	30.0	6.6
カンチーナ	111.7	28.4	99.1	14.5	22.7	5.0
サンパウロ	20.3	5.2	13.7	4.1	11.4	2.5
その他の国	3.0	0.8	12.2	3.6	123.3	27.0
世界計	392.7	100.0	237.8	100.0	452.2	100.0

出所: EDIBLE NUT MARKET REPORT. * 補填数値は推定値である。

ブラジルの国内生産は20州に集中する中で、東北地方に占める割合は99.7%に達する。東北地方の中でもパラナ州、サンパウロ州、モナシオン州、カンチーナ州及びバヤ州の5州が全国生産の97.5%を占める集中産地帯である。この東北地方にはカヴ-トナの産地帯として、1970年代から植林の奨励策がとられており、海外市場への需要の増加、政府による産地帯の奨励策により、80年代に入ると急速に拡大した。

国内にはカヴ-トナの産地帯は24工場によって行われ、平均年間180千トンの精製加工が行われる。また、油と皮の原料と胚乳の処理工場は8社で、年約40千トンの処理が行われる。このカヴ-トナ精製工場は80名はパラナ州内に集中している。

6 牧畜部内

6.1 牛

6.1.1 国際市場動向

世界の牛飼育頭数は12-13億頭と推定されており、XIV-XV期の16%増を
示す。その商業目的として飼育される牛のうち、牛乳を除くとその比率は20%以上増加する。又
主要産肉国の70%以上は肉用種であり、XIV-XV期に比べてその比率は増加している。なお、XIV-XV
期の飼育頭数比率は、ブラジルが68%と最も高く、アメリカが24%、その内国
全体の92%と高率である。従って、XIV-XV期、肉用種の比率は僅少である。

このように世界の飼育頭数に占めるXIV-XV期の位置は非常に高いが、主要産肉国と比較す
るとその生産性は低い。XIV-XV期中のアメリカは最も高い水準にあるが、中国の競争
力も高まっている。ブラジル、インド、及びパキスタンの生産性は非常に低い。なお、全体のレベルは低
い。このように、肉用種の低い生産性は土地や気象条件の不利、極めて粗放的な飼育
形態にもよるものと考えられる。

XIV-XV期国内に於ける飼育の天然牧草に利用する
放牧形態が変化する。集約的な飼育方法に中心を取り、粗放的な放牧は減少している。

ブラジルの南部、インド及びアメリカの飼育方法の品種は、ヨーロッパ系、在来種の
混血、ブラジルの北部及び中部では、セマ種と在来種の混血が主である。なお、アメリカの天然
牧草の質と飼育技術の向上に伴って、その生産性は向上している。このように、肉用種の生産性は概
して向上している。ブラジルの南部及び中部は、自然条件が類似しており、近代飼育
技術の普及と放牧の改良が期待されている。なお、天然資源は不足している。

アメリカ、インド及びブラジルの中部及び南部は、牧畜の最近輸出生産増の要因とな
す。特に、アメリカの肉用牛の飼育は、牛乳を除く飼育に占める牛の30-
85%は、肉用種の集中飼育である。ブラジルの肉用牛の飼育も、肉用種の集中飼育
飼育種の比率は、肉用種の比率は増加している。

〈牛肉の生産状況〉

世界の肉用牛の48.0~50.0百万頭で、その半分以上はヨーロッパ系を中心として、先進国に集
中する。南米大陸の肉用牛の生産は、世界の16.7%、その90%はXIV-XV期に集中している。

表 127

世界とXVZ-IVの牛肉生産

区別	1989	1990	1991	1992	85/90平均
XVZ-IV					
PIVシン4V	2,585	2,686	2,686	2,607	2,635
ブ7VIV	3,800	3,600	3,700	3,800	3,700
パ7777	*	*	120	130	130
シル777	*	359	320	320	350
小計	6,385	6,645	6,826	6,857	6,515
世界生産量	48,939	49,056	48,921	47,979	48,747
XVZ-IV割合(%)	13.2	13.5	13.9	14.3	13.4

出所: DIAGNOSTICO DE COMPETITIVIDADE DEL MERCADO. * 7-7-7L.

世界の牛肉生産増加率の肉全体の増加率(1.0~2.0%/年)よりも低く、その市場の一部を奪われつつある。工業先進国と比較した増加率(1.2%)は内発途上国に比べて増加率(2.8%)に下回っている。先進国の中でECの割合世界の平均(1.7%)に上り、米国は80年代以降0.6%の増加率に停滞してきている。

世界最大の生産国は米国(1年約10億頭)に次いでいる。これは従ってECが8.0億頭、CEIとXVZ-IVが7.0億頭と続く。XVZ-IVの中で7.9億頭のブ7VIV(3,700万頭)が最も大きく、PIVシン4V(2.6億頭)が次いでいる。シル777は7.7億頭、パ777は最も少ない生産規模である。XVZ-IVの生産は南米大陸全体の85~90%を占める生産の14%前後である。

最近数年のラテン・アメリカの熱帯地域は、XVZ-IVのPIV諸国(特に中国及び日本)と共に高度の飼育技術の導入と生産の増加と同様である。XVZ-IVの4国とも競争力を高める飼育技術の向上とそれによる畜産の増加、またPIVシン4Vよりも高い生産力、シル777及びパ777でのレベルは低い。伝統的に20ヶ国とも新しい技術の導入、公共の研究機関を通じて行われてきた。先進技術の導入によって民間部門の役割も見ることがある。1990年代の10年間の公共部門の民間部門への投資は減少傾向にある。

需要状況

世界の肉需要は生産量の増進と共に、購買力の高さ、工業先進国は需要が集中する工業先進国での1人年間の消費量が90~110kgへと拡大されてきた。内発途上国では年間の20kgにも達してきている状況にある。工業先進国でもっとも多くの消費は牛肉、豚肉、鶏肉、羊肉及び山羊肉などに従ってきている。この消費増進と増進

は 牛肉消費の増加によって変化して行く。

1人当り牛肉の消費量は日本を唯一の例外として世界的に減少している。日本は国民の購買力の高さに加えて食習慣の欧米化に伴って牛肉需要の増加が不十分な。牛肉消費の減少に反し、脂肪分の少ない精肉消費の増加がみられる。

1) 市場

世界の年間供給量 45~50 百万トンの中 うち約 8~10% (年間 40~44 百万トン) が国際的に取引されている。最近数年の供給量の増加率は貿易量の増加率と下廻っており、80~90 年間の供給量の増加率は年平均 1.7% にあつたに反し、貿易量の増加率は 2.7% にあつた。この期間中、世界の平均は工業先進国が平均 2.0% の増加とみられたに反し、南米途上国はそれと倍加する 4% の増加を示した。世界の貿易量中、先進国は輸出品の 83%、貿易量の 76% を占めた。

貿易量の低下は市場が不十分であることと不可分であり、輸入国の国内需要を補う手段として少量の輸出を行っているにすぎない。その量も年々減少し、最近では市場が不十分である。又輸入国政府の肉市場に対する政策によつて輸入量も上下し、輸出国側の輸出収入を増加する傾向も不十分である。このように加えて輸出国側の経済情勢 (インフレ、為替レート、利息等) が市場を更に不十分にする。

2) 世界の主要輸出国及び輸入国。

オーストラリア、ニュージーランド、アルゼンチン、ブラジル及びウругワイが伝統的に牛肉の輸出国であり、この 5 国は世界の貿易量の 50% 以上を占めている。ただし、牧畜の生産コストと輸入国側の市場条件によつて貿易量は毎年変化して行く。

EC は 70 年代の中期まで最も重要な輸入国であったが、70 年代後半の輸出国側には裏切り、強力を補助の代わりに年間 5.5% の成長を示し、現在では最大の輸出国となっている。EC が輸入側から輸出側へと変わったとしても、ブラジルの比較的同等の競争力を保つておくためにアルゼンチンが輸出国としての位置を後退し、ウругワイは政府の政策によつて輸出を伸ばしている。ブラジルの 80 年代は数年間におおよそ 500 万トンの輸出を行つたオーストラリア、CEC 況況の輸出国となり、アルゼンチンもその位置を奪った。この間、ブラジルの国内生産量に占める輸出量は、

合は 5% 以下 10~20% へと増加しており、又他の諸国(オーストラリア、フィリピン)と異り、牛肉も加工肉も多く輸出される。

世界最大の輸入国は米国で、世界の輸入の 25% を占めており、主要供給国はオーストラリアとヨーロッパであり、ブラジル、フィリピン、ウルグアイは衛生上の問題(ブタ-4)から畜産肉のみを輸出している。日本は現在世界の最大の輸入国となっており、オーストラリア、米国及びヨーロッパより供給を受けている。

以上の通り、キルコス-IV の輸出はブタ-4 の問題で前年より減少しているが、現時点に於ける牛肉の国際市場は、輸出に対する強力的保護下にある EC とその輸出国としてのオーストラリアが支配している。

表 128¹ 世界の牛飼育頭数

地域別	1980	1985	1990
ア ヴ ア	475.9	368.8	393.9
南 米	213.8	252.1	263.9
北 米	176.5	182.3	160.1
アフリカ	171.9	176.2	187.8
ヨーロッパ	134.5	132.2	124.0
旧ソ連	115.4	121.0	118.4
大洋州	39.0	36.3	31.2
世界計	1,327.0	1,268.9	1,279.3

出所: FAO

表 129 世界の牛肉生産量

地域別	1980	1985	1990
北 米	12,179	12,253	13,905
ヨーロッパ	10,799	11,002	11,091
旧ソ連	6,673	7,400	8,700
南 米	6,727	6,734	7,764
アフリカ	4,998	3,653	5,341
アジア	2,971	3,279	3,816
大洋州	2,052	1,768	2,183
世界計	46,394	47,089	52,800

出所: FAO

表 130 諸国の牛肉消費量

国別	1980	1985	1990
米 国	10,897	11,690	11,048
旧ソ連	7,046	7,880	7,389
EC	7,006	7,656	7,045
ブラジル	1,988	1,900	2,810
フィリピン	2,391	2,490	2,272
日本	602	790	1,067
カナダ	986	1,030	1,007

表 111 主要国の以当年平均肉消費量

kg

国 別	1980	1985	1990
アメリカ合衆国	86.0	82.0	71.0
旧ソ連	78.0	67.0	59.0
米 国	47.9	47.0	44.2
オーストラリア	50.6	40.7	38.1
ニュージーランド	58.1	35.5	32.5
カナダ	41.0	40.6	37.8
イタリヤ	25.9	24.9	21.5
南アフリカ連邦	19.5	18.0	17.8
ブラジル	16.3	12.0	18.7
日 本	5.2	5.1	8.8

出所: FAO, GATT

表 112 世界の牛肉輸出と牛肉輸入

1000 ㌧

国 別	1980	1985	1990
オーストラリア	845.5	692.0	1009.0
イタリヤ	642.0	805.0	994.0
米 国	112.5	151.0	956.0
アメリカ合衆国	469.0	260.0	918.9
ニュージーランド	302.8	363.0	859.0
ブラジル	183.2	530.0	230.0
オランダ	117.0	134.0	192.0
カナダ	150.5	113.0	110.0
旧ユーゴスラビア	75.1	51.0	27.0
コロンビア	54.1	9.0	15.0
その他	1,119.0	1,267	573.1
世界計	4,079.7	4,379.0	4,375.0

出所: FAO, GATT

表 113 世界の牛肉輸入量と牛肉輸出

1000 ㌧

国 別	1980	1985	1990
米 国	1167.3	948.0	1069.0
日 本	189.9	216.0	537.0
イタリヤ	355.0	489.0	399.0
旧ソ連	457.7	510.0	250.0
ブラジル	45.8	48.9	195.0
カナダ	87.5	110.0	188.8
エジプト	78.2	240.0	117.8
オランダ	35.0	2.0	90.0
中 国	11.3	32.0	38.8
南アフリカ連邦	35.1	18.0	23.1
その他	1,276.8	1,566.6	1,334.5
世界計	3,989.6	4,180.0	4,243.0

出所: FAO, GATT

6.1.2 XLC2-10におよぶ生産と市場

1) 生産、推定消費量及び輸出

XLC2-10構成国におよぶ牛肉卸肉は各国のPIB(国内総産)構成に直比例関係にあると仮定し、輸出による外貨獲得の面から把握する牛肉卸肉とすると、

XLC2-10におよぶ牛肉卸肉の200万頭は世界の飼育頭数の17%に相当し、南米大陸では90%の集中度がある。

毎年、屠殺数はアルゼンチン、ブラジル、12百万頭前後であり、パラグアイとウルグアイの両国を合算すると2百万頭程度に達する。屠殺による牛肉の生産量は平均の量は約600万トンを、世界の屠殺量の約12%に相当する。アルゼンチンとブラジルの天=2.7百万トンの生産を行っており、XLC2-10全体の91%を占める。

屠殺半1頭あたりの量は平均212kgで各国はほぼ同様であるが、保有頭数に於ける屠殺数の割合は国によって大きく異なり、アルゼンチンにおよぶ23%と最も高く、ウルグアイは15%、ブラジルとパラグアイは9%と低い。

各国の牛肉価格の変動は必ずしも牛肉生産量の平均的な傾向と一致する傾向は、季節的変動による供給不足がある。中でもブラジルにおよぶ季節的変動は大きく、収穫期の後半には生産量が減少する傾向があり、供給不足による冷凍牛肉の価格が下落し、施設の近代化と供給不足が深刻化している。

以上の国におよぶ国内市場が最大の傾向であり、生産した牛肉の約90%は国内で消費される。ウルグアイの牛肉生産量の60%は国内市場、40%は海外市場向けである。

国民の1人当り年間の牛肉消費量はアルゼンチンとウルグアイが世界的にも上位に属する高いレベルにある反面、ブラジルは低く、両者共に大規模な飼育がある。パラグアイは牛肉の消費量は低い。

表 124 XLC2-10におよぶ牛肉の1人当り平均推定消費量 (kg/人/年)

年次	アルゼンチン	ブラジル	パラグアイ	ウルグアイ
1989	66.0	17.9	30.6	67.0
1990	71.0	18.7	32.0	59.0
1991	73.0	18.0	32.0	59.0
1992	73.0	17.3	32.0	59.0

出典: ESTUDIO DE COMPETITIVIDAD

